主幹　麻生路郎

川柳雜誌

卯木追悼號

大正十三年二月三日第三種郵便物認可
昭和三年三月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌　第五卷　第三號

川柳雜誌社發行

▼本社三月例會

▼日　時　三月四日午後六時半
▼場　所　南區日本橋一丁目交叉點北辻東入　日本橋倶樂部
▼兼　題　「町内」三　句
▼會　費　三十錢

初心者の來會を大いに歡迎す

▼事務所移轉

本社事務所は去る二月四日に左記の處へ移轉いたしました

（舊事務所宛の郵便物は總て新事務所の方へ回送するやうにいたしてはあります が過つて返送されることが無いとも限りませぬから特に御注意を願ひます）

大阪市住吉區杭全町
六〇三番地
川柳雜誌事務所

各地支部增設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各所縣に支部を增設いたします。柳界のため且又「川柳雜誌」のために眞面目に支部幹事を引受け、極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は、本社宣傳部へ支部設置希望の旨申込まれたい

川柳雜誌　第五卷第三號　目次

感想・評論

卯木翁の生涯　麻生路郎
卯木先生の逸話　蛭子省二
柳俳の畑　前田雀郎

研究・其他

川柳の本質（三）　田中辰二
時代川柳大觀に就て（中）　岡田三面子
川柳沿革　故芳賀矢一
川柳的漫談「タラ」（二）　川上三太郎
漫詩ことばしり集（二）　長野晴濱
月評　紋太、山雨樓　春三、萬よし

募集句

三味線　前田雀郎選
代筆　矢田右大臣選
佐々木三福
借家　河野春三共選
本社二月例會　橋本二柳子報
川柳家戸籍調　安井ひろし
各地柳壇
彼岸のたこ〳〵（表紙）　柴谷街舟
題字　小出樽重
故卯木先生の肯像と遺墨（口繪）
編輯室から　革郎生

創作

ロンドンの一周忌に　麻生路郎
川柳塔
麻生葭乃　岩崎柳路
庄萬よし　太田朝陽
横田眠聲　岩本素人
酒井駒人　川合舟々
松盛琴人　三好革郎
高橋かほる　西本三笑
橋本二柳子
◇
宮本銀砂子　安西杏三
中見光路　水谷鮎美
桑原京郎　長谷川一徹
中澤濁水　松丘町二
石川双葉子　畑田炭車
嶋田翠峯　猪野燕柳
兼重白鷗　本田柳一路
朝田新水　越村加香
粒々集
長崎柳秀　佐々木三福
福田山雨樓　中野柳陽
蛭子省二　安川久流美
近作柳樽　諸家

逝け る卯木先生

▼木社客員、卯木今井幸吉先生二月三日遠逝として逝く、行年五十六歳、中央は四十八、九歳の頃のもの、左は翁が明治三十五年前後渡佛中、リヨンにて撮影せられたるもの。

▼短冊の句は「花の山　少しの風に面白し」

ロンドンの一周忌に

麻生路郎

お父さんはやはり　川柳々々と云つてるよ
お前がゐたらと思ひ出すと　煙草ばかり吸ふ
お父さんはネ　覺束なくも生きてゐる
日あたりのいゝうちだが物足りなさに變りない
信心をはじめたおッ母さんも可哀さうだ
お父さんの神經衰弱がわかるかい
湯ざめするまでお前と話そ　夢に來よ

卯木翁の生涯

麻生路郎

春淺き二月三日、横濱の今井卯木氏が亡くなられた。卯木氏は人も知る如く古川柳研究家の巨擘じ、近く『川柳江戸砂子』の改訂版が完成されることになつてゐたのに、その完成を見ないで長逝されてしまつたのは實に殘念の至りである。畏敬せる柳友の一人として惜しむばかりでなく、柳界にとつても非常な損失だと云はなければならない。

次に卯木氏の略歴及作風をかゝげて卯木氏を思慕してゐた人々と共に追憶の資としたい。

略歴は令息今井一郎氏が涙のまだ乾かない二月十九日の日曜日を割いて特に『川柳雜誌』のために執筆して下さつたものである。

略　歴

明治六年十一月五日、群馬縣北甘樂郡一ノ宮町にて生れ、幼き時同縣下、松井田町、富岡町、高崎市等にて育てられ、横濱に來り、横濱商業學校夜學部に入りて學び、當時國立第一銀行に勤む

明治廿五年頃より早稲田大學邦語政治科に入り明治三十年頃より兵庫縣灘町に知已を賴り、三十三年横濱原合名會社に入り同年より社命にて渡佛し、三十七年歸朝す、歸朝後一時社を辭し、三十九年頃東京、四十年頃より大阪に行き四十四年大阪にて「川柳江戸砂子」を著す

四十四、五年頃歸濱し原合名に戻り震災迄勤め、大正十二年九月大震災の折餘りに躰を使ひし爲か躰が弱り、十三年斷然會社を辭す

同年柳書刊行會發行の「柳多留拾遺」の校訂を爲す

大正十五年二月頃より增訂「川柳江戸砂子」の稿を起す、昭和二年夏頃には完成の豫定の處七月病を得て同年十一月上旬再發する迄の間約一ヶ月筆を執りしのみにて遂にたつ得はず今年一月より再復病重まり二月三日終に息を引く。

尙、辭世の有無に就いても伺つて見たが令息のお返事は次の通りである。

辭世は無之候、最近の作句も見當らず亡父初めての作句として

雪の朝水鳥寒い顏もせず

といふのがあるのみに候、死去の際は私

遠傍につきし者さへ一言も語り得ずして息を引取りし位にて候

卯木氏の性格を知るに最もいゝ資料としては自ら筆ゞ採つて『川柳雜誌』第三卷第六號（一昨年六月）に投ぜられた『川柳家の戸籍調』の數項である。

（三）別　號

椎木庵、川柳以外には啼血の號を用いた事もあります。

（六）職　業

新大屋、三月から初めて家貸といふものを貰ひました。

（七）好きな句

澤山ありますが一寸指定するのに迷ひます要するに輕妙な句を好みます。

（八）好きなタイプの女

日本髪に結つた下町風の女、愛嬌があれば結構。

（九）自信の句

殘念乍ら未だにありません。

（一〇）川柳以外の趣味

酒、旅行、芝居、音樂は一中、清元、歌澤、常盤津といふ順序なれど病氣の爲め今は只讀書に耽けるのみ。

（一一）嫌ひなもの

嘘つき、法螺吹き、先生ぶる人、愚痴（番號は戸籍調の質問事項を示す）

要するに卯木氏は渡佛して一層日本趣味を有難がつた人であらうと思ふ。大正二年頃になつて自ら作句することを棄てゝ專心古句研究の方面に努力された事、從來の作品にしても多く古川柳の影響をうけてゐられる點を見ても、さうした思想が胸底深く喰入つてゐたことゝ察せられる。故人が特に酒を愛せられたことは大阪時代に於て親しく知ることが出來たがそれが爲に多くの逸話さへ殘つてゐる然し近年は全く酒を廢してゐられると聞いてゐたので、そのために壽命を縮められたものであるとは思へない。

次に、その句風の一端を紹介するため『川柳卯木句抄』から數十句を拔いておく

西の宮　御ン裝束は生臭き
言ひ負けた母佛壇へ灯をともし
布施包む間に棚經は仕舞なり
泥足の猫を椽から掃き下ろし
法王の姿で靴を磨かせる
言譯の種が盡きれば春が來る
枝豆は喰ふ丈け喰へはじき台ひ
打つ眞似の手毛を搔き上げる
菊よりも似顔を褒める女の子
無いよりは少うしまし傘を貸し
猪の樣に傘差す向ひ風
初日の出慾を離れて拜むなり
もう嫁の陰口を云ふ勝手元
友達の内まで茶屋の傘を借り
夜櫻を男の癖に見て歸り
入王を助言同志が引受ける
新參と見ゐて火鉢に遠く座し
御隱居の聲色故人ばかりなり
今夜から俺ゞ寢ろよと涙ぐみ
獨り者晴着と見ゐて袖だたみ
殿の前一人笑へば皆笑ひ
敵役蜜柑の皮は覺悟なり
もう一度着てから女房入れたが
鴛鴦は吹き寄せられる樣に浮き
石の門きつい山師と見て通り
風呂の下賴んで鐘を撞きに行き
角田川衆寡敵せず渡るなり
父在ます昔は借りに來た癖に
逃げ所がないに娘は縮こまり
もう嘘も利かぬ女房ゞなりにけり
叮嚀に拭いて花嫁櫛を貸し
嚴談の使ゞ見えて江戸言葉
下女の手を屆かせて見て棚をつり
洋杖で長さを計る藤の花
株式で儲けて詫をする氣なり
佇めば聲かけられるピカデリー
何事ぞ預金係の薄化粧
會社員猫の額の亮せゝり
日移りがしてのゞ何も買つて來ず
見せ金になけなしの田を賣り拂ひ

近作柳樽

路郎選

今丁度壹百圓の貯金帳　廣島　露斗
金儲けとは思へども寒いこと　同　同
小生の立場としては稼ぐのみ　同　同
三十の年をかやうな姿なり　同　同
素人になり切つてゐるつもりなり　同　同
十圓の行方不明となりにけり　同　同
嫁ぐ日が明日にせまつて湯屋を出る　同　同
一月の廿五日か寒い事　同　同
東京へ妻をむかへる程になり　同　同
禁酒した頃が不思議な酒の味　大阪　毒仙
分別を貸せとはうまくもたれ込み　同　同
債券屋近頃ドダイ眼がかすみ　同　同
春雨や女給揮發油を買ひに來る　同　同
義母さんと呼ばせて五ツ違ひなり　同　同
歎けとて姫才色の高かりき　同　同
立ち消ゐの貰に似たり背の君よ　同　同
子は戻り石鹸箱をかゝへたり　神戸　鎌月
あたたかしされぞと文のたよりなり　同　同

花束のかたはらからも春ちかく　同　同
鮮人の逃げた話も十二月　同　同
奴凧の型ででつちの三ヶ日　大阪　十紫
清教徒會へば尖つた顔の人　同　同
腹心は叱られやうに馴れて來る　同　同
顎撫でる時はごまかすつもりなり　同　同
手拭が白しまばゆししんし張　同　ささ舟
怪我のわけ今度は俺の番になり　同　同
懐かしい人と話して昂奮し　同　同
病院にゐる間に十姉妹値が下がり　同　同
手内職目刺を燒けと叱りつけ　長春　我卯堂
生涯を呪ひ女は強く生き　同　同
餅花へ小供の夢が絡みゆく　同　同
蜜柑山お伽話にある日向　同　同
遊三がこりやなごと親子睦じく　大阪　多喜女
明日になれ明日になれとて髪を梳く　同　同
北風にさらされてゐる待ちぼうけ　同　同
一と晩にみな落ちたのか椿の實　同　同
壺燒の箸でおしへる夫婦岩　螢ヶ池　玉政
騒ぐのへ娘時々のぞきに來　同　同
其の頃の寫眞ですよと涙ぐみ　同　同
騒がしてそれ切り娘せまく居る　同　同
一ト鉢の菊に秋來る二階借　鳥取　聽松
その上に伊勢屋節約デーがあり　同　同

客を寢かして夫婦相談　同
祝詞よむ間に椎の實落ちる音　同
女帶とく部屋中が媚かし　同　大阪　伴内
婚養子コキ卸される佗び住居　同
ツンと女　歸り仕度したまでの事　同
スキ鍋屋肉ありたけの巾を見せ　同
信號の一字わからぬまつゞけ　同　螢ヶ池　鹿村
花合せ炬燵で一時寒くきき　同
三十の息子へ水をくんでやり　同
ぐちを云ふ母へ口笛吹いて立ち　同　大阪　蒼梧樓
めづらしい男が來れば失職し　同
婚にでもゆけとは見下げはてた口　同
燒跡へ何んとした吹雪であることか　同　島根　綠之助
寒さうな口笛で芋掘つてゐる　同
欺すだろと言へばさうよと否定せず　同
こうやつて居つても先のわからぬ身　同　螢ヶ池　邦郎
籠の鳥あきらめたのかゐさをたべ　同
懷かしさ中之島まで歩かされ　同
世の中はこんな物よと妾云ひ　同　大阪　愚尙
修養の積んだお方が馬券買ひ　同
氣の弱い同志居殘り助け合ひ　同
ガソリンの注入小鳥の樣な戀　同　魚崎　亂耿
刺戟になれて賣文の筆鈍る　同
口笛と知らず小鳥の和しにけり　同

つゝましく今日桃割を結ふて來る　大阪　秋風
疑ふでないがと探す方はいひ　同　同
質札と浮氣がたんとある女給　同　同
煙いのと寒いので少し揉めるなり　長野　高峯
我黨の大臣が來る今日の驛　同　同
白足袋に主婦の疲れがあり〳〵と　同　同
意義ある生活をしますと居を移し　大阪　三五樓
美しいだけの事嫁子も生まず　同　同
遮斷機になぐられさうに馬の顏　同　同
愛妾にいかにも似合ふ京言葉　和歌山　玉仙
晩年を知らずに妾子を孕み　同　同
小鳥飼ふ少女の心春になり　同　同
千圓の小鳥も逃げる隙を待ち　大阪　白蝶
割前の酒だあぐらを組んで呑め　同　同
國を出た時はと法被しんとなり　同　同
天井の節が冷たく笑ひかけ　佐世保　佳人
はばからぬ啞者の手ぶりを笑はれず　同　同
欠伸さへ叱る冷たい座敷にて　同　同
孝行で母を泣かせる暮し向き　別府　晃卓
ラヴレター燒いてしまつてふと淋し　同　同
蠅の戀ひざでふと見し日向ぼこ　同　同
お隣りはたんと賞與が有つたらし　大　虛白
レディメード合はぬところは口できせ　同　同
親として洋行までもさしたのに　同　同

なんですか肺病のくせに深呼吸
プロマイドためて貴女はどうするの
喀血に直ぐ來て呉れと書かされる
人樣を案山子と見たが落度なり
實業の片手間名譽領事なり
母はじめみんな無事かと爲替が出
類燒へ濟まない樣な家を建て
眩暈するほどに小判が降つて來る
こみ入つた話シャン〳〵湯が沸ぎる
丙午いつそもろふてやろうかな
教室の窓から逃げたわしでした
女の氣引いて見るよな朧月
昇給に女房少々氣を直し
報恩の姿合掌して逝かん
錠前が一人前の役をする
出勤は門口までの子をあやし
鶯が鳴きましたよとショウルを脱ぎ
逃げ仕度左樣〳〵と包んで居
燒芋屋お伽噺で待たせとき
他愛なく連を待たして醉つて居り
密談の果てゝ竝んだ裏梯子
習ふことみんな準備といふ娘
關係の關係も來る名刺受
たまさかに愛想を言へば聞き違へ

螢ヶ池	邦文
同	同
同	同
鳥取	鐵洲
同	同
大阪	源坊
同	同
滿洲	草明
同	同
大阪	蘿楓
同	同
同	亭助
同	同
螢ヶ池	彦春
同	同
同	光哉
同	同
大阪	毒仙
同	同
山口	白鷗
同	同
鳥取	穂波子
同	同
神戸	二南

迷信を母なんぼでも知つてゐる　同　大阪　耿三
俺の足跡で誰か迷よやあしないか　同　同　三
猛獸のやうに靜けさに吠ゆよう　和歌山　柳哉
塵探りは蜜柑の皮のお正月　同　同　武藏坊
博士でも藪醫でもよしこの病　同　大阪　同
カフエーを出ればマッチが殖えて居る　同　同　白帆
たしなみごとは云ふものゝコンパクト　同　同　無限
串柿を一つむしつた松の内　福岡　同
女事務社長室から遁れ出る　同　同
汗拭けば國境の松伐れてゐた　同　同　江
十一文半の素足のアカギレよ　同　大阪　よし
日曜の先生を訪へば琵琶が鳴り　同　同　春
父の留守カナリヤさんの水を替へ　同　兵庫　陽
人蔘を洗ふ手先へ冬が來て　同　同　狂子
死んで居る父の名で來る年賀狀　同　青山面　同
北風がこわくなる程金が出來　同　同　雅幽
野へ一人立てば自由になつたよう　大阪　同
つゝましく夕べの鰯を燒きなをし　同　同　公子
冤狀をも一つ取らう　丙午　同　神戸　春
踏切で汽車を待つのか月あかり　同　同　愚陀
正夢と言はうか母が逢ひに來た　大阪　同
不肖の子それでも甲があります　同　同　子
人生をあらゆるものに例へて見　同　雪　葉
繼母へうまくつかへて妻やつれ　同　出　子
腕組をするこゼンマイゆるむ音　同　神戸　水
出來心しかも機會が與へられ　同　同　火
親にまで肩身の狹い思ひさせ　同　大阪　香
黑髮の亂れくるいしお七なり　同　備後　東城
寫眞から緣談頓こはかごらす　同　同　子

湯氣の中アダムとイヴの二人也　兵庫　珍郎

一日が四十五歳の命なり　大阪　貞雄

元朝は神主らしき氣にもなり　同　龍川

鮮明ですとおまけの樣に云ふ版屋　滿州　德坊

懷手確にあつた札をよみ　神戸　芳香子

高下駄をはく程道はぬれてゐず　大阪　賀名

新店のまう客二人逃がしてゐる　姫島　觀月芽

臨終に金の置場を忘れてゐる　春長　箱八

塵漁り大阪がよいやうに云ひ　大阪　鯉友

編棒のせはしい動き落葉する　尾崎　吟女

子の事を思へと女房諫めてゐる　堺　太路

淋しき草に雨のしめりがまわる　奈良　玉鳳子

いつはりの顔が鏡前に出來　京都　桃妖子

半分は師匠に釣られ諂ふなり　大阪　新一郎

家探し夫婦でなるも日曜日　大阪　雪峰

愛してる男の顔をたてさせる　兵庫　香行

無料乘せる程にタクシー待つてゐる　大阪　陽喜

夜伽して昔を語る一くさり　大阪　秀亭

父親の後はそつと馳けてゆき　東京　野人郎

女優ふと國に殘した母の事　小松　水聲

すねて居て手毬の糸をきつくゞめ　大阪　豚二郎

壇の浦こゝぞと琵琶を立て直し　大阪　梢雨

引けば直ぐよる運の糸見付からず　神戸　幻柳

代筆の二度も三度も聞く宛名　大阪　松壽

白粉の甘い匂ひも二十なり　姫島　二竹村

愛すればこそ氣持よい濡れタオル　神戸　郊

漸やくに小金が出來て子を死なし　大阪　將兵

ちゝ都合惡い客だと妻を出し　高知　仙蛸

柳俳の畑

―なぜ川柳は川柳でなければいけないのか―

前田雀郎

今年の春、わたしが雨吉君の需めに應じて、たはむれにものした

春立つや河童の皿の解け初めて

といふ句が、近頃一部の――どうせ『おせつかい』な御連中だらうけれど、――その一部の柳人や俳人の間で問題になつてゐるさうである。人傳てに聞いたのだから、如何なる批評が行はれてゐるのかその眞は判らないが、何でもその人の話では川柳家はあの句をありや川柳ぢやない、俳句の出來損ひだと云ひ俳人はいや飛んでもないことだ、あんなものが俳句であつては堪らない、ありや川柳の出來損ひだと、お互に我が畑へあんな句に侵入されることを、不名譽としてゐるらしいのである。

わたしは、この話を聞いた時、まつたく恐れ入らない譯には行かなかつた。――俳句とも川柳ともつかぬ、たゞ自分の即興を十七字に纏めただけの、云はば大風の日に鼻唄をうたつたやうな、愚にもつかぬあんな句なのだから、わたしにしてはそれに對して何と批評されやうと風馬牛だが、あんな句をとつこにとつて、ヤレ川柳の俳句のと騒いでゐる、御連中の相變らずのお尻の穴の小さゝに、わたしは恐れ入つたのである。――わたしは正直『まだやつてるな』と苦笑せざるを得なかつたのである。

川柳、俳句繩張論は、何も今に始まつた問題ではないが、なぜあの人達――といふのは今の川柳家とか俳人とか云はれる人々――は、これは川柳、これは俳句の領分といふやうに『句』にハツキリ分けへだてを附けなくては居られないのだらう。な

ぜ句こいふものを（こゝで句こいふのは十七字型の短詩を指すのである）單に句こして素直に受取ることが出來ないのだらう今も云ふ通りわたしのあの句の場合なぞ、これは自ら問題が別だが、何にしても窮屈なことである。

一口に俳句こ川柳この特徴を說く時、よく『俳句こは自然を叙したもの、川柳こは人事を抒べたもの』こいふやうな分け方が使はれてゐるが、一體これは誰が決めたものなのだらう。成程その傾向は強い、が然し決して兩者の全き姿を示したものではない。初心者に手取り早く兩者の姿を思はせるにはまことにいゝ言葉であるが、これをそのまゝ川柳、俳句の境界線へ、お上が打込んだ榜示杭かの如く思ひ込んで仕舞ふのは少しせっかちすぎる。——ところが多くの人を見ると、或ひはさう思ひ込まないまでにも、自分でさう決めたがつてゐる。——自分で自分の體へ繩を卷いてあがきの取れないやうにしてゐるのである世の中にこんな馬鹿々々しい事があるだらうか。川柳、俳句に對する一種の謬見はこゝから生じて來る。

果して俳句こは自然のみを叙すべきものか、果して川柳こは人事のみを抒べるべきものか。——俳人には自然以外の日常の俗事に、耳を借すことを許されてゐないのか、川柳家は人事以外の自然の姿には一さい眼をつむつてゐなければならないものか。——人間の詩情なぞこいふものは、第一、そんなに都合よく勝手のきくものなのだらうか。

一體川柳こは何か、俳句こは何か。——しばらく兩者の發生にまで遡つて考へてみたい。云ふまでもなく兩者の母體は俳諧である。ではその俳諧こは如何なる文學であるか。この事は何もわたしが喋々するまでもない。芭蕉七部集を一瞥した人なら、誰が如何なるものであるかを、よく領くことだらう。俳諧こは決して當今の俳句に見るやうな、あんな狹い窮窟なものではない。それは自然の美しさを背景こして展開する人事葛藤美の一大繪卷である。芭蕉にして既にその連句に於いては

後朝や餘りかぼそくあでやかに

の如き、濃艶極る句を詠んでゐるではないか、この小說的、戲曲的溫かさこそ俳諧の生命なのである。

俳句こはその俳諧の一部の獨立したものである。俳句は俳諧から獨立するや、いつかその母體であるところの俳諧の、廣く自由な精神を忘れ、徒らに芭蕉の『幽玄』こか『閑寂』こかいふ、彼だけの持つ風流のその形のみを眞似て、いはれなく人事の一さいを俗こして排して來た。その結果は俳句をして竟に今日の如き寫生萬能のはなはだ無味な、氣の利かぬものこして仕舞つたのである。

俳句が俳諧から獨立すると同時に、川柳もまた俳諧から獨立した。これは俳句の置き忘れて行つた人事方面の句を提て、

俳句に對抗して起つたのである。がこれも、俳句が風流の爲めに風流を事として來たと同じく、川柳の爲めにのみ川柳を續けて來た結果、やはり一つの觀念の世界に墮さなければならなかつた。――かくてこゝに川柳、俳句の世界は、確然と區別され得るに到つたのであるが、然しこれ、果して詩歌の正しい姿だらうか、問題はそこである。

川柳とは何かといふことを考へる前に、わたし達は先づ、なぜ自分は川柳をつくるか、――つくつてゐるのかといふことを考へてみなければならない。わたし達は川柳の爲めに川柳をつくつてゐるのだらうか、俳句の爲めに俳句をつくつてゐるのだらうか、恐らくさうではあるまい。詠はねばゐられないから、――自分の氣持を表現したいから句をつくるのだらう。この氣持は誰の爲めのものでもない、皆自分の爲めにである。自分のためにうたうものが、なぜ他の型を借りねば、たよらねばならないのか、――この考へを深めて行つたならば、川柳も俳句もそんなけじめはいつか眼の前から消えて無くなる。あるものはたゞ表現樣式としての『句』の姿だけである。

あの人の川柳は俳句に近いとか、あの人の俳句は川柳に近いとか、いふ言葉がこの頃よく使はれてゐるが、その人が俳句とか川柳とかいふ概念の中に作句せず、本當に自分の句をつくらうとするならば、勢ひそこへ――その俳句と呼んでもいゝ、また川柳と呼んでもいい句境へ行くのは當り前である。なぜならそれは『句』といふ詩型の母體であるあの俳諧の、自由な廣々とした天地に遊ぶことだからである。――『句』には川柳の領分も俳句の領分もない。俳諧の曠野に於いては、俳句川柳繩張論などもう無用のあけつろひである。

『句』に還れといふ事――俳諧の精神に還れといふことは、と云つて決して川柳を殺すものではない。川柳を殺すどころか却つてそれは川柳をよりいきゝとさせ、眞面目に生かさうとするものでなければよくない。――俳諧といふ母の懷へ還ることは、本然の姿に立ち戻ることである。

この自由な境地、そこへ憧れの眼を向けた川柳家が、今までに決して無かつた譯ではない。曰く短詩、寸句、市民詩、草詩等々の運動は、いづれも己が棲む『川柳』なる世界のあまりに窮窟さに、――概念化された『川柳』のあきたらなさに、わが『句』のさうした進展を願つての、川柳の一つの解放運動ではなかつたか。この點俳人よりもやゝ目醒めてゐたと云はなければならないが、惜しいことには、みんなまだ川柳の幽靈にとりつかれてゐた。眼の前の形式を打破ることが出來ても、遠い世につくられてゐた形式は打破ることが出來なかつた。いや、それを打破らうとはしなかつたのである。――川柳といふ名を捨てながらも、その實際に於いては、彼等は『川柳』なる觀念を

捨てられなかつたのである。これではその運動が後戻りするのは當然で、彼等の事業の揃つて中途半端に終つたのは、みなこゝに原因する。――もう一歩その上への飛躍、それさへあの人達に出來てゐたならば、なんと幸福な川柳界であつたか知れないのに。

が、然し、このやうに昔から、俳句川柳縄張論に於ては、川柳家の方が、俳人よりも案外話は判りよかつたのである。たゞそれを自覺しないだけの話で、事實は既に一歩その縄張から半然と足を踏み出しかけてゐたのである。――けれどそれが夢中でやつてゐる仕事だけに、こもすると川柳の幽靈に引戻されたがるのである。

江戸座の系統に屬する俳書『武玉川』や『俳諧繰』の作品を川柳と呼んで少しも怪しまない程の雅量ある川柳家が、何も今更、これは川柳の領分のと、その縄張爭ひに角目立ての必要はないではないか。――それとも、そんなに『川柳』なる名が有難いのだらうか。

わたし達は何の爲めに句をつくつてゐるのか、先づかう考へて行き度い。話はこゝから始まるのである。――形式を捨てゝ精神へ、わたしの願ふのはそこである。

さても川柳家は『川柳』なる名に於て禍されてゐることよ。かうなるともう苦笑ごころの騷ぎではない。あゝさいふ嘆聲もつひ洩らし度くなるのである。――三・二・九――

川柳書架（三十）

川柳當百集

番傘川柳社編

▼當百氏の「卷頭に」の一節に川柳に携はる期間の短かつた爲に作品が尠く、從て句集の貧弱なのを、私は必ずしも恥とはせぬが　もつと〳〵研究もし、力ある作もしたいと思ひつゝ遂げずに來たことを遺憾とする（中略）少年にして名をなすことの不幸なる如く私は周圍の空氣、時の情勢から、僥倖的に實質以上に名を得たもので、自分自身の爲にも亦川柳界の爲にもこれは決して幸福事ではなかつた。その實質以上買被られた當百の句集である。讀者或はその期待を裏切られて、啞然たるものがあるかも知れぬ　けれどもこれが當百の凡てであり、當百の全精力を盡したものである。これに依つて當百の價値を上下さるゝこと固より甘受する處である。この句集若し何等の價値なく、川柳界より當百の名を抹消し去らるゝも、少しも遺憾はない。

昭和二年七月二十五日　當百

▼昭和三年二月一日發行、小型版一五二頁、定價金八拾錢、發行所、大阪市浪速區惠美須町三丁目一一六愛文社

▼明治から大正の初期にかけて柳壇に雄飛した當百西田嘉吉氏の句集である。當百氏は人も知る如く、家庭川柳をもつて終始した作家で、今日これを繙くも亦吾人の肺腑を突くものがある　敢て一讀を薦む。

川柳の本質（三）

田中辰二

それ等はごれも單純な笑ひであるが、一歩自己の優越感を保存しつゝ對象の迂愚や小さゝに向ふ時起つて來るのはサチーレである。

代脈は何をこいつの氣で見せる　（柳樽　五）
藪醫そのくせにうるさく多言なり　（同　一〇）
仲人にかけては至極名醫なり　（同　一三）
醫者衆は辭世をほめて立たれたり　（柳樽　二）
小供醫者匙をとられて手をかされ　（同　一一）
匙の柄でえりをかき〳〵加減する　（同　一四）
匙加減しろうと目には惜しいやう　（同　一七）
代脈答へて死生は天にあり　（同　一四）
供の醫者もりころしたに相違なし　（同　一九）

之等には前の笑ひよりもうすこし味ひの違つた笑ひがある事に氣がつかうと思ふ。併し柳句には單純な笑ひもかみしめると其處に單純な笑ひとしては濟まされない、このサチーレの氣分を扱つたものが多く見受けられる、例へば『道成寺』の安珍清姫を見よう。

安珍は手前で祈る氣がつかず　（柳樽　二）
安珍ははした錢などおつことし　（同三拾遺　明和）
安珍は死ぬまでとんとかくれた氣　（拾遺　明和）
安珍はみかんをくくみ〳〵逃げ　（柳樽　四五）
清姫は推量のいゝ女なり　（柳樽　拾遺）
兜巾などなで〳〵娘くどいてゐ　（同　同）

ごれも滑稽味を扱つた想像句である、が之等は唯滑稽を滑稽として觀照するユーモラスな笑ひよりも考へ樣によつては何かう

がつたやうな氣分があり、その姿態を想像する吾人の優越感が不言の中に見ねてゐるやうな氣がする、でこそその一山伏の姿態、それを眷戀する一女性の心を思ひやつて同情よりはむしろ笑ひが滲むのではないだらうか、ひとり安珍清姫のやうな傳説の人物ばかりでは無い、史上の人物でも、又それがよし高貴の人であらうとも英雄豪傑であらうとも柳句の作者はそれ等を自分等と同等又は以下のレベルへ引きさげ、更に時代の世態人情を作者と同的化の世態人情同樣に考へ、輕い明るい淡い氣分でふざけ、かくしてゐる事までもさらけ出して其處に笑人の氣分を一層高めたのでは無かつたらうか。

源左衛門鎧を着ると犬が吠ね　（柳樽一拾遺、拾遺）
佐野の馬かんろのやうな豆をくひ　（同拾遺、同拾遺）
最明寺何ンのかのとてにじりこみ　（同　三）
引けものでこそあれ常世とり揃へ　（同　六）（同　四九）
佐野の馬戸塚の坂で二度倒れ　（同　八）
（此句柳樽拾遺明和の句には下五が二度ころびとなつてゐる）
佐野の馬はなれ山でも二度倒れ　（柳樽　一〇）
源左衛門あすのあさのをしてやられ　（同　一五）
ひだるいをわすれて常世舞を舞ひ　（同　一六）
最明寺因果なとこへ宿をかり　（同　一八）
なきごとを開き直つて常世云ひ　（同　二一）
翌年の雪にはさくら炭をたき　（同　二六）
翌年の雪には炭の火にあたり　（同　四七）
まけおしみ骨と皮との馬を見せ　（拾遺、三〇）
宿錢に三ヶの庄は大きすぎ　（同　天明）
源左衛門貧乏神に見かぎられ　（同　三二）
源左衛門そつと乘つてはそつと下り　（同　三五）
惜しい事常世萬りやう焚殘し　（同　三五）
物干へ三ヶの庄を植ゑならべ　（同　同）
鉢の木は火となり後に土となり　（同　三七）
源左衛門雪の中から掘出され　（同　三八）
源左衛門走らぬ馬に鞭をうち　（同　三九）
源左衛門荒砥一挺とぎなくし　（同　四三）
源左衛門戸塚の臺で乘りつぶし　（同　四四）
天德寺最明寺へはひしがくし　（同　四六）
放火臺焚火の禮に一度たて　（同　同）
驛だと呼んだは常世ひしがくし　（同　四七）
佐野の馬鞭の酢くなる程たゝき　（同　五四）
旅信へ濡れ手で粟の飯をしひ　（同　五八）
最明寺まだ有るかのとかへて喰ひ　（同　五九）
豊年の雪とは常世云ひはじめ　（拾遺　明和）
源左衛門ひんぶくりんの袱を置き　（同　寶暦）
源左衛門さぼてんなどはとうに賣り　（同　拾遺）
（同　明和）

源左衛門先づ花ござを借りにゆき　（同　實暦）
源左衛門人にくれたと贅を云ひ　（同　明和）
源左衛門あじろに組んだ足袋をはき　（同　同）
最明寺うたがひ深い藪をよせ　（同　明和）
源左衛門さつくと着ずにそくつと着　（同　拾遺）

と謠曲『鉢の木』から歌つた句作の玉石混淆の例ではあるが之等に見ゐる最後の連用段止めが終止形で止めるより何か奥齒に物のはさまつたやうな感じを助長させる場合が多い。そして此の連用段止めは川柳の好んで用ゐるもので『鉢の木』關係句で一二句此處に探錄しなかつた句もあるが多少の重複はまぬがれぬとして柳樽六十篇及柳樽拾遺だけを通じて見ても百四句の中で此の連用止めが四十一句數へられる。そして數多いこの連用止めが言外にまだ言ひ殘した何ものかを持つてゐるやうな形をしてゐる爲に、何でも無い笑ひの中にも皮肉味が觀方によつては加へられると云つた場合も多く出て來る。一方川柳には其の冒頭に於て省略の形や突如として接續詞や指示代名詞などを持ち出して來て此の氣分を增させる事もある。

併し川柳に於いて題材を武士……中でも意志堅固な國家老のやうな例外の型もあるが、遊里で肉慾の奴隷となり孤燈に向ひ沈吟する淺黄裏、よぼ〳〵の奥家老、妾になつた妹故出世した俄侍、藏宿などで小さくなつてゐる貧乏旗本など……や、色慾に溺れる僧侶或は後家、無智蒙昧な下女……その中にも相模下女のやうな色慾から立つもあるが……金錢に執着强い關西の者や所謂伊勢屋と云ふ型じ代表さる吝嗇屋、若い振袖新造に溺れる隱居、寄生蟲のやうな居候、無學者、無筆、物質の爲に自由になる私娼や飯盛、物質に惱む公娼、さう云つたものにとる時は此のサチーレが克明に痛快にあらはれてゐる。それはサムライの都の江戸の人々が元和偃武以來養はれて來た一種の思想、金錢や女に執着するのを恥とした考へに立つと、どれもそれ等は醜惡の人物と見られざるを得ないからであつた。そして對象が醜惡であり笑ふべきものであればある程自己の優越さが際立つて感ぜられる。從つてフモーリソシエ、フモールに過ぎぬやうな形式をとつてゐる句でもサチーレが多分に存する事を認める。而もサチーレが過ぎれば過ぎる程其の句は辛辣となつて來るやうな氣がする。よく川柳が皮肉だと云はれるのは辛辣なものが多いからである。（以下次號）

詩漫

とばしり集（二）

長野晴濱

ふし穴

貧乏な人が窮死した
實に不合理な死だ
氣の毒だ
救貧の設備が何故に斯くは貧弱なんだらう
實に恥しいことだ――

金持が贅澤をする
實に慨歎に堪へん
何故公共のために使はんのだ
何故いゝ事のために出さんのだ
一たい彼等には修養がない――

この位の所しか見ねなければ
お氣の毒ながら
君の眼はふし穴ですぞ
額の下、肩の下に位する
二個のふし穴にしか過ぎないのですぞ

神様の横で

幸ひあたりに人は無し
來かゝつた男は
見まはして
人がゐないのを見て
恭しく拜んでから
貴い神様の横手で
立小便をした。

置きざり

到頭追出してやつた――
去つて行つた同僚Sを
然ういふ目で見送つた彼は
Sが世間に名を出し始めるこ
いつか好意を感じ出した。

彼はSを訪ねていつた
そして更めて交際を求めて

斷られた。

慣慨して歸つたが
だが今度は彼は
自分が置ざりにされたやうに感じ出
した。

二で割る

渡る世間に鬼は無し――
だが、だが
人を見たら泥棒と思へ――
ごうも變ですなあ
一たい先生
ごうしたらいゝんでせう。

「鬼は無し」プラス「泥棒と思へ」
寄せて二で割るんだね。

中を探るんですか
では。

鈍いなあ、喝。

殼と雛

時が來ると
玉子の殼を破つて雛が出て來る
或はまた
玉子の殼が破れて雛が出て來る。

破れるのと
破るのと
そもさん
いづれかこれ本統？

破れるやうになるから破るのだ
だがまた破るから破れるのだ。

おい、おい、何を言つてるんだ
瓢箪、なまづ
意味を成さない……
などと言ふ人は言ふがよい。

だがごつちにしても
雛が殼の中で十分に成長しなければ
破れる事も破る事もない。

だが雛が成長した曉には
ごうでも玉子の殼は
雛の容器ではあり得ないのだ。

我れ思ふ

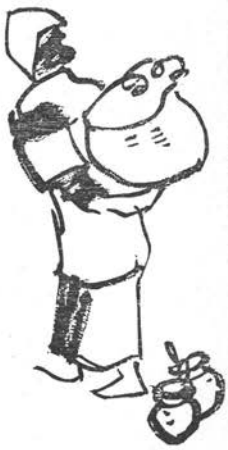
我れ思ふ
故に我れあり
いゝね
我れあり
故に我れ思ふ。

必ずしも

逆は必ずしも眞ならず
故に
眞は必ずしも逆ならず
然うだ
今の世の眞だつて
必ずしも悉くが
逆とも限るまいかな。

人間は？

人間は
幾種類かの元素より成り
それ等の巧なる仕組によりて
いろんなことを思つたり
いろんなことを行つたり
物理的の作用をなすものなり



川柳塔

○ 麻生車乃

ロンドンの一周忌（四句）

まぼろしであつたか死んだ兒の裸
一周忌かしこもこゝも草萠ゆる
一周忌こんな蒲團で寢てゐたか
如來さまにも諧謔ぶりを見せてゐる
子を捕られた雀けろりと戸樋から出
女の子揃への柄が氣に入らず

岩崎路

○ 犬殺し殺し疲れた日もあらん
ちりれんげ大分君は醉うてゐね
藤間流等と半玉氣取つて居
飛行家になり度い等と女給言ひ
火吹竹戯談に吹くと面白し

○ 庄萬よし

學術優等四五本酒も呑み
幸にも健忘性で生きてゐる
驚きはこの人にしてこのキッス
蛤の多寡に末の子泣き出だし
打撲傷微かに夢を追ふ如し
魂の飛躍の銚子並ぶなり
好きな座敷で霜燒痒いこと
年取つた事を笑ふて寫眞帖

○ 太田朝陽

增給に道寄りもせぬ年となり
三日目に元日を書く日記帖
俄雨傘賣る人もぬれてゐる

○ 横田眠聲

又星の數をよんでる子淋しい
彼女笑へば絶對服從

祝二柳子居の移轉（三句）

青疊宅の羽織をたたんで居

木の香り短冊かける釘をうち　岩本素人

○考へりややつぱり金で濟むはなしものみなは虚無なるものを慾にぼけ

大臣に大臣らしい顔はなし　酒井駒人

今更に腕の細さを如何せん

○別莊に奉公してた妻なりきエプロンをはづして女給驛へ來る　川合舟々

簿記臺に婦女界があり妻の留守

○三分の二まではひとのものになり連の娘の髪へしげ〳〵母座り　松盛琴人

眞綿など付けて夜伽の二時三時

七分程剃らし病人飽いて來る

○禮を篤ふして尋ねても知りまへん遲刻させまいかんてきに火花散り　三好革郎

道幅を取つて女は並んで來

○空間と時間火花の中に生き　高橋かほる

○手拭を取ると白髪のすぐき賣羽仁もと子著等を入れて本三荷　西本三笑

艶歌師の時計をのぞく雨上り

○髭剃つて靑く淋しやひとり身の朝飯がまづいこの頃金がなし　橋本二柳子

豫期せざる今日をエプロン掛けてゐる

○霜やけの子がづくねんと立つてゐる石橋のとこで菜洗ひすはる也　宮本銀砂子

寒椿二つばかしをつないでゐわしは呑めぬと社宅で父すはり

折紙に母は鋏を取られてゐる

◇落ちついた愛を淋しいものにする泣き伏したその襟足は强かりき　安西杏三

新刊をぱつたり閉ぢた受付子剃刀の下にゆだねた顔のごと

退屈な巡査あくびもせず歩み

辨當と工夫だん〳〵遠くなり

對岸で彼れこれ批評するがいゝ
8の字によじれて舞妓走るなり
退院をする氣頭を分けて見る
子が泣いた處で手紙やめにする
子を連れて妻病院を小さく出る

中見光路

◇

箸紙へ淋しさ一つ減つたこゝ
買はされた刀子供へ切つて見せ
ようゝ云ふ聲に無沙汰も含まれる

水谷鮎美

◇

よい婚の酒かんぴんで買ひにゆく
だしぬけの二人に友の方がてれ
ある時は露骨にバンのの事を云ひ
愛慾のきづなを斷つて養子去に
戀文を風に吹かせてながく讀み

桑原京郎

◇

琴線に觸れ得し笑靨見逃さず
賽の河原もみぞれが降つてやう
さて難儀な事に拾圓札ばかり
大衆の信を問はんゝ二千金
半と出てほつたくられし二千兩

長谷川一徹

◇

愛すればこそ忍んでる手紙なり
かくれんぼ見つけられたい鬼も出來
たよりない人と添ひたい願なり
通勤の大淀の霧吸ふて居る
喰はんが爲の都を見下ろせり

中澤濁水

◇

喫ひつけてくれる妓愛想よく咽せび
お辭儀してショールを合す立話
順々に子供を訊くも久し振り

松丘町二

◇

締め切つた襖の白さ寒くゐる
往く人の足のリズムも春の街
眼を疊み鋏を伏せてもゝの蟹
秋は秋は白く光れるピストルか
哄笑のかげの弱さを見透かされ
柘榴熟しぬただれきづたる戀に似て
護符のやう男へ手くびいただかせ

石川双葉子

◇

氣儘でか疵があるのか戻つて居
復習の硯へ朝の陽がながれ

ありあまる金に妾もようもたず

◇　畑田炭車

上役へ只はい〳〵も哀れなり
財産もあるに左へ傾いて
虚榮になれ虚榮になれと美裝員
ほめる所だけはやつぱりほめて置け
評議員啞のやうなも交つて居

◇　嶋田翠峰

奥様に不用な品が多過ぎて
血のにじむ五圓を女輕う受け
孝行は仕送りだけであきたらず
嘘にでも優しく言へと女親
風邪ひけば二階の隅にほつとかれ
カッポ服とれば錦紗の松の内

◇　猪野燕柳

辛うじて孤閨を守る針仕事
お芝居の秋水光るだけ光り
詩集を借りたが戀のスタート
かりそめの縁ですまさぬ姉藝者

子供もうバネの電車へ見向かない

◇　象重白鷗

ボロ買ひの目にごうしやう術もなく
奥様は派手好きと知る衣紋竿

◇　本田柳一路

經營難知らず女給のふざけやう
唄ふだけ唄ひモシ〳〵亀になり
やす〳〵と出來て名づけに又苦勞

◇　朝田新水

電報を打つにトランク邪魔なもの
大層に云はぬと養生してくれず
外交員奮闘振りを靴で見せ
奈良の宿泊らぬ客にも手を仕へ
自動車の人に宿屋が多すぎる

◇　越村加香

やせたこどズボンのビジョウ馬鹿になり
ネクタイが若くこのごろ勤まらず

粒々集

御影　長崎柳秀

情死する髷を氣づかず母が結ひ
入札の朝の拍手高く打ち
宣傳のビラの浮いてる水溜
借金の返せた所で夢がさめ
塗り膳にうれしい人の指の跡
仲居すぐ縣人會だなと思ひ
お流れの御返盃のと呑される
燒芋屋これじや損だと組み更へる

大連　佐々木三福

二人の若さをたれか奪ひたり
眞ん丸くそらの兩手に抱かれて
打倒す事を軍鷄から教へられ
冬木いま内に力を押しかくし

大阪　福田山雨樓

本箱にものうし漢和大辭典
子が泣いてゐる隣から暮れそめる
傘持つて驛まで來るに塗つてゐる
三味線へちやんと下役だとわかり
代筆が聞けば逢ひたいだけのこと
代筆に候處多すぎる

長春　中野柳陽

たはむれの齒あとに小指悲しさう
貸家札家號が淋しスリガラス
いつそ淋しさは枯木へ春の雨

光州　輕子省二

貯金帳利に利がついて用はなし
人の世の掟に蚤の逃げたこと

金澤　安川久流美

洋服に女の髪の毛が笑ひ
平凡だみな誘惑をさけてゐる
ドン底に一番ボロイ事を强ひ
踊つてる爪先すでに社會なり

時代川柳大觀に就て（中）

岡田三面子

娘のかみ酒呑童子の時に出來　一七一頁
　娘は嫐の誤、酒呑童子は中村座の脇狂言（市村座は七福神森田座は福神遊）

賴光の物具あらまし貰ひもの　一七三頁
　物具は武具はの誤

前九年具足のいしやう法度なり　一八四頁
　不明

綻びた衣手にはく縫合はせ　一八七頁
　てにはで

銀箔であかりをたてる闇太刀　二〇五頁
　闇の太刀、の落字？

重氏も寺號を聞かれ困るなり　二〇七頁
　不明

高野山人見知りする橋があり　二〇七頁
　高野の玉川に架せる奥の院第三橋を御廟の橋と云ふ長四間四尺幅五尺五寸、三十七枚の板の裏に金剛界三十七界の種子が書いてあつて、無明の橋といふ、罪業深き者は渡り得ずと、

元日に大根一ト切レ喰つたまゝ　二一〇頁
　太鼓即ち太鼓持の略語の誤讀

惜しい武夫を冷素麺にする　二一九頁
　難波六郎でなく、茨木へ引退した片桐市正のことゝ思ふ、類句

饅頭は喰はず素麺喰つて居る　樽一七・一五・五
　蟄居して素麺ばかり喰つて居る　樽一五・三七・一
　されども此の人素麺やたら喰ひ　樽三・二七・六
　惜しい武士素麺櫃へ入れて置き　樽三・二九・一〇
　此の時茨木は素麺が名物であつたのであらう

今に見ろよと重盛のいひ始め　二三頁

今見ろよとは重盛がいひ始め　樽三・五・七

安藝守時分はふつこほどのこと　三三二頁

不明

拜殿をかい込んで來る安藝の守　三三二頁

拜段をと呼んだ句の出所及び意味知り度し　樽四・三・七

長刀をかい込んで來る安藝の守

射落とすと十二支四匹いがみ合ひ　三四一頁

いどみ合ひ　樽四・一ウ

猪の早弓矢へ七つ目がからみ　三四一頁

弓手へ

猪の早太樣と尋ねて山師來る　三四三頁

猪早太樣と聞いては山師來る　樽三九・一五

むつかしい鳥でおほつかなくと吟み　三四五頁

呼子鳥の句なり、鵺に關係無し

馬ぐらゐ遣つてもいゝと菖蒲いひ　三四八頁

遣つたがいゝ。本書二八〇頁星鹿毛一件の穿ち

竿先になつてと菖蒲たつて止め　三五〇頁

竿先になるを、註に人先に立つてとあり、自分も斯く解した事があつたが、先きが短い、老年とするが正解

仲綱を折々連れて夜を更かし　三五一頁

仲綱も

馬くづしを討ちそこなつた源三位　三五五頁

宗盛が強いて馬を所望したことに關係があるらしいが、馬くづしの辭不明

戒名を鳥に聞かせて放すなり　三七一頁

回向の爲にする一般の放鳥のことで、放鵺には關係なしと思ふ

御所の緒の車をいゝが大喰らひ　二八八頁

五ッ緒の誤五ッ緒の車は、簾の端と編み目の糸の革との間に風革が二タ筋下りつて居る車

信濃者だけ大軍を喰止める　二八九頁

信濃者だけ大軍も喰止める　樽五四・一〇・一五

類句、さしもの大軍信濃だけ喰止める　樽一五・九・一

○信濃ほどあつて大軍喰止る　樽三九・三六・一一

○大軍を喰止めたのはおしな殿　樽五三・六・三

何れも義仲でなく、慶長五年五月關ヶ原の役、眞田昌幸幸村上田城で、秀忠の三萬七千の大軍を邀擊し、遂に秀忠に關ヶ原の戰に會せざらしめたこと

木曾殿も遂には西へかたむかれ　二八九頁

義仲も遂には西へかたむかれ　樽一四・三・九

くりからのやうに兼平落馬する　二九一頁

註に倶利伽羅不動劍を前に兩手で構へて居る、とあれど、兼平が劍を呑んだ形を、倶利伽羅龍が劍にゲル〳〵卷附い

たに見立てた句作

敦盛及び絹賣も回向する　三〇三頁

熊谷堤で上州の絹商人が追剝に殺されるといふ傳説あり

夫もたぬ身もましかやと尼公云ひ　三二頁

二位の尼と限る據所を承知したし

亡どのや出て下さいと二位の尼　三二頁

七どの　誤、七兵衛景清？

千の手で引くと三保の谷氣がつかず　三九頁

引くに

かみゆひに成つて景清ねらふはず　三二頁

不明　樽一四・一六・二

範長はねこそぎ劉備負けこける　三三頁

長坂坡、博奕の丁半に掛けて負けと云ふまで、此句にては熊坂に關係なし

傳授事になるとうそ土佐坊はつき　三三頁

とは衍、謠曲正尊、起請文の邊秘傳　樽一五・一七・一〇

きめごこをきめて年增は靜なり　三四頁

一般の年增女のこと、靜御前でなからん

お妾は故事をいひ濱で舞ひ　三五頁

御妾は故事を云ひ々々　樽拾三上

義經の首鎌倉で物を云ひ　三五一頁

含み狀＝三六頁との關係を詳知したし

借宅で出來たは源氏百人一首　三六一頁

本文及び註、借は假の誤

食ふことが先づ第一と定家なり　三七〇頁

定家撰り

けい者でごら打つたも百の内　三七二頁

げい者でごらを打つたのも百のうち　樽三・三乙・四

おごり子にはまりきつたも百の内　三七三頁

此の二句後鳥羽院龜菊が事

色男百のうちでは神祇なり　樽二〇・二五　三七三頁

註に橋本の神云云、單に、千早振神代と云へる歌を指したものではなきか

百人一首かぢをも一人入れておき　樽三・二六・一〇　三七五頁

梶に非ず鍛冶にて、後鳥羽院が事、刀劍をうつ事を好ませたまひ、後に隱岐國へうつらせたまひ、菊一文字の刀も此時の事なりし。一夕七五頁に詳し、

類例

湯加減を知つたも百の内へ入れ　樽三・一一・五

明惠上人根に押してきめられる　樽九・六・一〇　三八二頁

謠曲春日龍神のきりシテ「……さて入唐をワキ「とまるべしワタヒ「渡天は如何にワキ「渡るまじ地「さて佛跡はワキ「尋ねまじや……掛合の所

もちつとの事で日蓮片見月　三八三頁

片月見、尤も片見月と云ふ例もある　樽三・三七・九

身延山名號ほどな御面相　三八四頁

不明、延身山久遠寺は甲州巨摩郡身延村

無欲の全盛末世へ名を殘し　三八八頁

高尾の事ではなきか

清姫はけじ〳〵を見てあゝこはい　四〇三頁

ごらであひ日高の寺に着いて居る　四〇九頁

二句共不明

先の方御かはりで見る道成寺　四〇九頁

此の句、外四五、お能拜見の句、別に集めたし

諫言の文字は櫻の木へにじみ　四一二頁

高時の句として、諫言の辭不明

ふりそでを千早の外へ出して置き　四一五頁

名代＝身代りと云ふまでの洒落

文箱持つて官軍の陣へ來る　四一三頁

義貞の陣へ勾當の内侍からの歸りを勸める文箱が來るといふ事か？

室町の御所は桃咲く頃に出來　吾三四頁

十軒店の雛見世、説明がないと判らぬ

師直は事もこゝじたさゆをのみ　四一三頁

奢った茶の會をしたと云ふ事か、さゆとさよとの惡洒落か

不明、此本出一四頁以下

毒と書いてもすばらしい直段な　四一八頁

とはをの誤にてはなきや

鼎ませぬくらになゞ、初手はしやれ　四四四頁

ぬはの誤植

山吹のよごれをそゝぐ虹の雨　四五三頁

虹はのち野路の誤寫ならん

萬の木にすぐれて筆をうつちやらせ　四五六頁

のは衍、萬木に、此句本書八七頁巨勢金岡能見殿の故事にも、元信の事にも、双方に取れる

評定に勘助よほど中へ出る　四五七頁

座を進める事であらうが、理由が判らぬ

兵法を知らねば惡るい目つきなり　四五八頁

勘助でなく、劍術使などの凄い眼の事か

一つ目を持てば座頭も出世なり　四五八頁

果して勘助の句であらうか

あんまは埋めてもけんぴきは越後勢　四五九頁

咳癖は肩のあたりの凝る病なれど、按摩咳癖と續けたゞ按摩のことなども云ふ。此の句にては謙最負の駄洒落？

大小豆團扇へあへる川の中　四六〇頁

はてゝの誤寫

拔かぬ太刀一生無事で功名し　四六一頁

信玄の事と斷定しかねるやうである

本能寺三日あかぬが不運なり　四七二頁

錦きて故郷へはいる四日なり　四七六頁

三日と四日との意味不明

ならぬ一位をとつた(の脱？)は猿と蟹　四一九頁

猿だ虎だとしばらくは鳴り止まず　四八六頁

二四〇＝二四一頁に置くべき鶴の句

耳塚へあぶの出さうな草が生え　四八七頁

あぶの出さう、意味判らず

きやつ〳〵と召すにそろり〳〵出る　四九〇頁

召すのに

大名の手せんじ利休させはじめ　四九一頁
手煎じの辭不明、自身茶を立てることか
鍋之助こと五右衛門と改める　四九二頁
鍋之助不明
味噌すりをやめて大阪方へつ　四九三頁
佐吉が秀吉に見出されたことゝしては、大坂方へ附きの語が仰山すぎる、これは眞田昌幸、幸村が紀州九度山を出で豊臣側に加つた事ならん。
御互に御無沙汰をする諏訪の月　五四頁
眞田には關係なからん、參考句
弓に弦張つて氷の上を行き　樽四一・一・裏
花咲けば諏訪の親類遠くなり
諏訪の湖夏渡のは月はかり
猿の子を犬の輔佐するつぶれ前　五〇六頁
大野治長に關係無し、秀吉が病あらたまれる時、幼名犬千代の前田利家と德川家康とに、秀頼を托した事
市之正質藏に手間取る氣なり　五〇九頁
淀君の人質を謀つた事であらうが、判然せぬ
六夜には至極の所と市之正　五〇九頁
人質と成つて御殿山にでも住めば、二十六夜待によい所であります、と云つて勸めるのか？
香は兜をば末世に留めるなり　五二頁
名香も武功もかをる龍頭　六二頁
前者を重成の兜、後者を鶴ヶ岡義眞の兜と斷ずべき據所あり
錢をなげたはかたのない智謀　五一頁
眞田でなし、桶挾間に向ふ前、熱田神社へ戰勝を祈つた時の織田信長の故事、四六頁　鍋型の所へ列すべき句、外に鍋型なかたはいゝがてらでは極惡るし　樽七〇・一七・六
鍋型はいゝがてらでは極惡るし　本能寺
ひらのねは傘も一寺のたからなり　六二頁
のはかの誤植
稲田九郎兵衛は領地も一首入れ　樽八・二〇・六七頁
はばかの誤、蜂賀の家老、淡路を領す、百人一首の中、源兼昌に淡路島通ふ千鳥の歌あり、例、
御家老の知行百首の内に入り　樽四・五五
敗軍の螢扇の上を飛び　五二頁
三成に非ず、賴政の切腹した平等院の扇の芝
てつぱうで士卒はしのぐ冬御陣　五三頁
此の句の鉄砲は嘘でなく艫
御扇子に風を(も？)あたらぬ御代となり　五三頁
御國へは扇でひゞく芝の鐘　同
增上寺鐘の口の厚みが扇の丈ほどある事？
虫も利も食ふ(の脫？)は御代の鎧なり　五三頁
畠で鶴をとつた(の脫？)は彦左衛門　五三頁
金玉がをしいとうけぬ御墨附　五五頁
御墨附よりも殿の度胸がほしいと、彦左が云つたとでも云ふ句か、不明
拔　參り片道虎の威勢なり　五六頁
此の句だけは駿府の家康と春日局でなく、小僧などが藤堂家の行列の跡へ尾いて行く事ならん、以下次號

川柳の沿革（教授上の資料）

故芳賀矢一

本誌三十八號「金子元臣氏の川柳點」と題し。路郎氏の意見があつた。此頃多少中等學校の國語讀本中のを蒐めて、皷鉾誌に連載せしが。金子氏の文は最も多く採用せられて居る點に於て。川柳家は重要視せねばならぬ、「女子新國文」にも載つてゐて、芳賀矢一博士の教師用の參考本（昭和二年四月版）を見ると終りに川柳の沿革が說いてある。別に耳新たな記事ではないけれど。今や博士は逝かれたのであるから、拔記して教授上の資料を窺つて置くも、決して徒爾の業ではない。（S・E生）

◆川柳の肖像

初代柄井川柳の肖像で、柳樽第一篇所載のものを轉載したのである、初代川柳姓は柄井名は正通、幼名勇之助後八右衞門と改めた、俳號を（緣亭又は無名庵）川柳といひ、その祖は東叡山寛永寺建立の際、法親王に隨從して江戸へ下つた宮侍である、代々寛永寺の末寺である淺草の龍寶寺（現今の榮久町四〇番地）の門前町に住み八代將軍吉宗時代の享保三年に、その門前町の家に生まれた、長じて同町外數町の名主となつた、川柳の號の由來に付き、新編柳樽十九輯の祝宴の序には、その住居たる新堀端を取り、『その河岸なる柳をもてそが儘號こせられ』とあり、一應の參考にはなるが、その前後に於て柳の字を用ひた俳號の流行した事實も、全然無視することは出來ぬやうであり又何となく萬葉の『霰ふり遠つ近江のあと川柳又も生ふてふあと川柳』などを寓してあるやうな氣もする（以上三面子說）、かくて田沼時代の中、寶曆明和安永天明及寛政六年までの間、前句附の選者中最も盛名を馳せ、寛政二年（昭和二年より百三十七年前）九月二十三日、年七十三にて物故し、前述龍寶寺に葬られた、二代は初代の子、三代は二代の弟、いづれも不肖四代以下は門弟の中から後を受け、十代まで繼いだ、

◆教授上（金子氏の川柳點）の注意

評釋文は最も冗漫を厭ひ、警拔簡勁を尊ぶものである、本文の如き川柳の鋭さと相俟つて、文章も亦實に鋭く、不卽不離の間に妙味が旺溢してゐることを見逃してはならない、本文に採つた川柳は比較的解し易くて、且上品なものであるが、これ以外に傑作も多く、殊にその暗黑方面を詠むものに至つては、拍案嘆稱措く能はざるものが多い、實に川柳は人間の詩で、ちやうど十七佐藤の民衆化した浮世畫と同一で、唯美主義の現はれが、美人中心となつて表現されてゐる、從つて性に關する句も亦多

いことを知らなくてはならない、尙川柳の墮落したものに狂句があることも一言して頂きたい。

◆川柳の沿革

川柳の沿革を知るためには、まづ前句附の變遷と冠付について一言する必要がある、いつたい短歌が自由化し、俗化して連歌となり、連歌が滑稽化して俳諧となつた、更に俳諧の發句が獨立して、俳句となり、俳諧の二句が獨立して前句附となり、發句の獨立したものが俗化して冠付となつた、この前句附と冠附とから、川柳は生まれたものである、卽ち冠附の題と答とを一つにして詠んだものや、前句附の上の一半卽ち五七五が獨立したものが川柳となつたのである、前句附の起源について人見川柳は足利時代に起つたやうにいつてゐるが、この說は首肯しがたい、足利時代から豐臣時代に亘つて、後世の前句附によく似た狂連歌や、滑稽機智を旨として俳諧の附合が世に行はれた、北窓瑣談に『宋祇・伊勢行脚の時、小兒の木に登るを見て、『つるつると猿より輕く木に登り』と謂ひしに、小兒見かへりて『犬のやうなる法師來たれば』と附けたとある、山崎宗鑑の編める『犬筑波集』に『きりたくもあり切たくもなし』（前句）『盜人を捕へて見れば我が子なり』（附句）等の二句のみの附合が夥しく載せてある、要するに其の起源については菊岡沾凉の『近代世事談』にある延寶の頃に起つたといふのが穩當である、で、前句附の法は宗匠から下の句を出して多くの人に上の句を附けさせ點をつけて、褒美を出したのである、例へば『雲の上から足がぶら〳〵』に對して『茶釜をほ自在天まで釣り上げて』と附け『四角な玉子もあるものにこそ』に對して『烏の子も紙にて丸うすきもせず』と『丸くて四角長し短し』に對して『丸盆に豆腐半丁持ちんば』とつけるやうなものである、これを好むものは益々多く、後には宗匠から上の句の初五文字を出して、次の七文字五文字をつけさせた、冠附、笠附といふのがこれである『いつの間に』對して『片しは失せて雛の後家』『さまざまに』に對して『うその口きく大晦日』の如きはその例である、寬永の頃になつては、冠の五文字を三つ出して、三つ冠に各々七文字五文字を附けさせて勝負を分けた、三笠附といふのはこれである、かくしていよ〳〵博奕に近いものになつたので、享保の初、町奉行から嚴禁の命が下り、一時その濟をひそめたが、寶曆の頃になつて、また前句附の流行を來したそしてこれらの前句附の點者中の錚々たるものは柄井川柳であつたのである、川柳は寶曆七年に萬句合せの興行をして以來、年々の例となり、月次の千句合なども興行した、寶曆の末集まるところの句一萬六千中、秀逸四百四十餘を選んで細字に認め、大半紙五六枚に印行して摺出した、その細字摺が曆に似てゐるので世に曆摺乂は曆版ともいはれる、曆摺中前句がなくて

も一句だけで、句意の解されるものを集めて一帳となし、いもせ川柳樽第一篇と號した、その時は明和二年であつた、これよりさき四時庵紀逸といふものがあつて、萬句を興行した折にも高點を附けた句を集めて『俳諧武玉川』といひ、相續いて十篇を出版した『柳樽』の體裁は蓋しこれを模倣したのである。こゝに於て前句附の點であつた川柳は前句を離れて、附句を獨立させたのである、實に川柳は俳句の形式を假つて、俳句以外の世態人情を詠じようとし、世は程なくその風靡する所となつたその句を川柳點の句といひ　通常略して川柳といふ、川柳が寛政二年に歿する迄、柳樽は版を重ねて二十三篇に至つた、その子二世をつぎ二世の第三世を嗣ぎ二世の門人風流庵曉丸四世をついだ、轉じて化政時代に至つていよ〳〵隆盛を極め、柳樽の刊行はます〳〵多くなつた、さはれ四世に至つて風體の革新を謀つて柳樽の名を改めて俳風狂句と稱した、かくして川柳をして獨立の地位を占させようとしたが、その末がいよ〳〵廣くなつて、その風體は却つて月に非となり、五世に至つて川柳の精神は亡びてしまつた、阿世の極はつひに川柳の川柳たる所以をも失つた、されど表裏明暗の差はます〳〵甚しく、卑猥口にすべからざるものとなつた、故に川柳を知ろうとするものは、四世以下を顧みる必要はない、要するに川柳は初代に於て最もその特色を發揮し、その不羈な點に於て、川柳は遙かに俳諧にまさつてゐた、言辭の選擇は勿論、切字または季の法則もなく、語數も時には過不足を許し、形式も亦すべて自由であつた、剩へ人生のことであつて、苟くも川柳の題材とならぬはなく、和歌の優美以外、俳諧の洒脫以外、いはゆる人生の隱微かくれたる人生裏面の美は、戲場といひ、遊廓といひ、かげま後家、下女、居候など、和歌俳諧に洩れたるものはすべては好材料となつた　しかしてその警拔にして寸鐵よく、人生の缺陷世態の眞相を活寫せることや、諷刺の極め、峻鋭なることはその特質であり、滑稽の中に眞理あり、眞情あり、笑ひの中にまた涙の籠れる所、大いに稱すべき點である、現在古句研究家としては、阪井久良岐、岡田三面子、西原柳雨、武笠山椒、今井卯木、井上劍花坊、外骨氏等があり、その註解參考書に至つては枚擧に遑かない、阪井久良岐氏はその時代の特徴をあらはした句として、次のやうに擧げてゐる、寶暦調『女湯へ起きた〳〵と抱いて來る』、明和調『その手代その下女晝は物言はず』安永調『元日はまだこわいから戸を明けず』、天明寛政調『賣れのこり御尤なが二三人』享和文化調『兒は起きる火燵斗はおこるいそがしさ』文政調『漠の家芝居の夢を喰べたがり』天保調『時刻移つて屁の匂ふ長袴』弘化嘉永調『里いもの本阿彌下女がまかり出で』安政慶應調『松造る庭を眺めて脂さがり』明治初期調『今ならば徐福寶丹でも送る』明治後期調『華嚴の瀧覗けば巡査コリヤと言ひ』

募集句

三味線

前田雀郎選

ちと唄ひやすなと仲居三味をよせ　柳秀
帳場から女將も三味を聞いてゐる　鮎美
寢そべつたまんま三味線教えて居　東城子
もう彈かぬ三味線を母賣りもせず　源坊
三味線の當場太夫眼をつむり　萬よし
もう皆んな忘れましたと三味を取り　吟女
お芝居の話も終り三味になり　惡源太
後添はサノサ位は彈きまする　重陽子
三味線の歌も知つて若且那　新一郎
三味線を看板だけに持つて行き　菊路
三味線を持ては本藏下屋敷　將軍星
いゝ聲を出して見そうな三味線屋　亭助
三味線屋何にする氣か猫を飼ひ　晃卓
三味線を止して身の上話なり　草明
三味線を彈きたがる〳〵唄はない　同
法界屋姉は三味線びくばかり　桃妖子
三味の音がふつつりやんで雨の音　同
三味線をのつけから彈く婆藝者　伴内
お二階の小母さん一寸三味も彈き　同
三味線へたゞ手拍子を叩いてる　十紫
太杆は少々疳が立つたやう　同
雨つゞき隣の三味も聞き飽きる　耿三
十二時に三味線くどく彈かされる　同
三味を側へ直して一つつぎ　琴人
流行ッ妓なか〳〵三味は持たぬなり　同
大薩摩ただ三味線のある計り　光路
隣室の三味へ小聲でついて居る　同
あの人の方へ三味線目がとゞき　吐露樓
三味線のまづ明けまして梅の春　同
後添は三味線二擬持つて來る　同
攀ぢ登るやうに小娘三味を彈き　町二
拐帶のやたら陽氣に彈かすなり　同

五　客

三味線をうるさいと云ふ久振り　高峯
三味線屋人立ちのする程彈かず　玉政
撥だこのある嫁坦味に嫁いだり　無心
思ひ出の三味とはお客知らぬなり　緣之助
彈けそうな顔して金比羅船々　突支坊

川柳家の戸籍調べ

□　係　ひろし生

(一)姓名(二)雅號(三)別號(四)現住所(五)生年月日(六)職業(七)好きな句(八)好きなタイプの女(九)自信の句(一〇)川柳以外の趣味(一一)配過者の有無(一二)嫌ひなもの(一三)川柳に手を染めた年月

お馴染の戸籍調べを引きつゞき掲載致します。御照會申した向きは左記へ御返事下さい。

大阪市南區安堂寺橋西詰　安井寛宛

(163)川上三太郎

(一)川上三太郎(二)ナシ(三)ナシ(四)東京南品川四ノ四二(五)明治廿四年一月一日(六)ナシ(七)ナシ(八)ナシ(九)ナシ(一〇)ナシ(一一)有(一二)風景(一三)二十一三年前

(164)岩本素人

川柳警察から來たが、お前はと言ふお調べであります。斯うなつたら惡びれずに白狀に及びます(一)岩本素人、親の付けた名は秀逸で戸籍もさう成つてゐますがそれは私の知らない事です(二)馬骨(三)ありません。雅號の馬骨さへあまり用ひません。人間には名前が一つあれば澤山だと思ひます(四)大阪府北河内郡友呂岐村郡(京阪沿線香里)(五)之れを書かさ

(人)爪彈きは逢ひたい見たい姿なり　吐露樓
(地)許嫁調子合はすに暇がいり　翠峰

代筆

代筆の筆の半ばへ三ひ直し　町二
よいとこへ來たと代筆頼まれる　一蝶
萬年ペンもつてゐるのが書かされ　鮎美
代筆は責任のない書きつ振り　柳秀
代筆の前に電灯吊り直し　草明
書き誤つて代筆恐れ入り　光哉
代筆にわしも夜學へ行つたぎり　眠聲
代筆は何所か自分の意に滿たず　木三
解つてるように代筆ゥなづいて　穂波子
得心の行く樣代筆頼まれる　重陽子
代筆少し意見を説べてみる　綠之助
代書人月利に金も貸して居る　無心
代筆のすつかり社長の癖に順れ　伴内
代筆を頼み判だけ押して居る　突支坊
代筆はこれでよいかと讀んで見る　秀郎
もう判つた樣に代筆墨をすり　陽喜亭
字のうまい妻で代筆させられる　膠二郎
讀み上げる代筆それで結構なり　十紫
雜談の中に代筆馴れて居る　幻柳
代筆はならぬで投票あきらめる　東狂子

(天)三味線をあつさり借りて持餘し　十紫

矢田右大臣選

代筆は自分の智恵を混ぜて書き　水聲
番地分らず代筆一服し　申哉
代筆は敎えられてる姿なり　吐露樓
代筆の嬉しくもない男文字　同
縣名を知らず代筆地圖を出し　源坊
代筆を知らずサインを嬉しがり　同
請取を息子が書けば手をほめる　蒼梧樓
手紙など頼まれながら職がなし　同
代筆は明るい窓へ向きを變へ　三五樓
褒められて代筆墨をすりなほし　同
代筆は云はねばならぬ恥も聞き　光路
筆ならしながら代筆問ひ返し　同
代筆に漢和辭典を引いてゐる　さゝ舟
代筆につまりは金を送れなり　同
代筆と知れる手紙の文句なり　新水
代筆で初めて知つた病氣なり　同
見知りおかれて代筆を頼まれる　琴人
代筆へうまく書いてと頼んでゐる　同
解釋をして代筆は讀みきかし　萬よ〻
代筆は重患らしい亂れやう　同

れるのは泣く程つらい明治十五年一月十日ださうだが私は信じたくありません(六)版畫(七)澤山あり過ぎますが最近の川柳雜誌から「ぜんざいの色になじまず餅白し」「靜雲俺と言ふ奴は日向のボール紙」「町二こんな行方の句(八)肉感的の女但若いのはきらひです。そしてたゞへ毒婦でもよろしい一癖ある女(九)ありません(一〇)畫です。描くのも時にはいいが見るのが尙すき人が描いてゐるのを見てるのが最上です(一一)一人あります(一二)女の付き合ひ、釣り、働く事(一三)大正十五年九月(それ迄にも讀むのは好きだつたが作らなかつた)柳珍堂忌の頃

(165)松盛琴人

(一)松盛錄郎(二)琴人(三)ナシ(四)大阪市此花區上福島南三丁目六十六番地(五)明治十三年五月廿四日(六)職業印刷(七)是は六ケしい、型も内容も生きて居るなら刻々に進化する、今日好きな句も明日變るかもしれぬ、それでも並べろと云へば並べてもいゝか並べ切れぬほどある、で先づ路郎氏の句が好きだと御返事して置ます(八)女らしい女(九)未來(一〇)寫畫俳句讀書宗教其他澤山持合せど皆もの

代筆の小供にしてはうまいもの　同
（佳）一通り聞いて代筆無理もな　さゝ舟
代筆を頼んでおいて炭をつぎ　吐露樓
代筆へ筆の悪さをわびてゐる　幻柳
女の子母の代筆させられる　伴内
プロマイド署名係を雇いたし　町二
方言もいつか代筆耳に馴れ　風鈴坊
御見舞に行つて代筆頼まれる　悪源太
代筆へ餘り氣用の多すぎて　太路
代筆のもうすら〳〵と書き終り　二水
代筆の鼻へ葉巻のいゝ香ひ　郊村
代筆の母の言ふ通りには書けず　柳河樓
（人）代筆にその鮮かさ認められ　双葉子
（地）代筆を頼んで急な旅に出る　鮎美
（天）選擧場ひと筆頼みたいところ　町二

選後の言葉

「代筆」と云ふ題は作りよい題である。それ丈け亂作、つまり無造作に作られ過ぎる而して作りよい題ほど類想が多い、範圍の狹まい「代筆」など殊にそうだつた。「代筆の履歴書」「代筆に墨」などは隨分多い。

借家

◇　三福選

締めにくい戸にも障子も慣れて住み　郊村

自分が直感する構想は他の人も感じてゐるのだから、最一歩進んで、早く此域を脱して頂きたい。

で最一つ云ひたい事は全没者が非常に多い

投句者七十餘人の内二十數氏の多數である、期待して投句した句が發表されて見ると一句も拔けてゐない、そこに作者の腦みがあるが選者としても全没者を多く出すと云ふ事は、大きな腦みである。私が選をしてゐる新聞柳壇では一人一句は必ず拔いて、全没者を出さない事にしてゐるが、新聞柳壇と作家の登龍門とする、權威ある柳誌とは譯けが違ふので止むを得ない。

從つて前掲の句を御覽になる通り、拔かれた句は構想技巧敍法句品等について、それ〴〵傑出さを見せているのである。

それから全没の方に、御願ひしておきたい事は次回私の選で諸君とお目にかゝる時は、全没者を出す選者の腦から、救ふて欲しい事である。

つまり大いに努力して、これでもかの意氣を見せて頂きたいのである。（三、二、七）

佐々木三福　河野春三　共選

恩人を訪へば訛しい借家にる　翠峯
技手　技手で一生借家住ひなり　二竹

にならず（一一）若いのが一人名は壽枝と申ます（一二）蛇、毛虫、嘘吐く人（一三）雜俳として明治三十六年頃迄にて中絶近頃復活す

（166）嶋田翠峯

（一）嶋田萬治郎（二）翠峯（三）ナシ（四）大阪市東區南農人町一丁目山田印刷所（五）明治三十六年十一月十六日（六）植字（七）（孝行はいゝが男かしなびて來）路郎氏其他先輩の好い句に依つて教へられる（八）優しくて、溫和しい娘、首すじは白く、足首の細さ方、身長は四尺九寸位い髪は顔に似合へばよし、二三、ほつれ毛があつて明るい顔、そして自分の趣味に理解のある二十まで（九）まだ公に發表する程のもなし、目下製作中、しかし自分の句は自分としては自信ある（一〇）登山、讀書、寫眞、觀劇、映畫、讀書、人の自慢話を聞くこと（一一）ナシ（一二）よく喋べる男女、冗談云ふ男女、生意氣な男女、鹽物、飯のコゲ、人參、雨降り、其他多々（一三）大正十五年十月大正日々に出句してから、以來馬行、松郎氏に導れて今に至る、以後若し親に勸當されても妻に去られても、陽が西から出ても、川柳には精進する決心

文明は大屋の屋根より高く建ち　春公子
轉々の一生借家に終りけり　晃卓
法律を知つて借家に氣が強い　町二
二十年借家に馴れて子澤山　琴人
先代も俺も借家の性に合ひ　東狂子
すさかはる借家へ無駄な大工沙汰　水聲
値上から借家協議の夜が續き　陽喜亭
ごうしても借家と見へぬビルヂング　菊路
いゝ借家でも立ちそうない地面　三五樓
借り手から借り手へ移る老舗料　重陽子
滯こほる家賃に塀のこけたまゝ　双葉子
借家だと言はぬ許りにすき間風　惡源太
落ついた借家借家の味があり　二水
裏長屋乂集金に來た無駄な足　光哉
借家札淋しく風の吹くまゝに　芳靜
雨漏りを家主適宜に聞いて行き　草明
住み換へて見ても借家は借家にて　東城子
一棟の端に家主か住んでゐる　源坊
郊外の呑氣借家の持つた味　箱八
不祥事の借家へ記者の出つ入り　谷水
借家人すつたもんだと滯り　柳秀
借家人家主へ癪な氣が揃ひ　我卵堂
十年を此借家にも住み慣れて　さゝ舟
借り家になれて近所の溫か味　光路
借家から借家へ延びて街になり　同
義理堅く長屋に馴れて子澤山　伴内
建附の悪い借家も住み馴れて　同
同じ型借家間違ひそうに建ち　桃妖子
ビルデング借家と言ひ大き過ぎ　太路
天井のしみも借家の二十年　萬よし
資本家がなぐさ借家の一人なり　吐露樓
借家から借家へ巡査面白し　同

五　客

上數を數いて借家の春を待ち　亭助
日當りの悪い借家と知りつゝも　虛白
家主とは別な氣持で火事に遭ひ　高峰
一枚の襖動かぬ儘に住み　さゝ舟
建附の悪さ大屋のひとなり　蒼梧樓
（人借家法提げて代表ベルを押し　賀名芽
（地）人格をチト家主に無視されて　緣之助
（天）借家から朝の陽影をふみしめ　翠峰

選後

川柳はプロレタリア藝術であらねばならぬとたれやらは言つた。首肯される點もある「借家」と無産者、切るに切られぬ因緣がある此題に對した時、吟者の腹の底からこみ上げて來るものはプロレタリアの本當の叫びであつたのも道理である、だが未だまだ其叫びの深さ廣さに於て遺憾があるやうだ、お互

よきに　よきに
ルービサア
ルービサア黒ビール

はも一歩つき込んだところを狙ひ度いと希望する。

(軸)覇氣も無く借家の夢に馴れて　三福

◇　春　三　選

借家から家主の屋根の高いこと　二水
澤山な工場借家が見あたらず　眠聲
氣の弱さまた借りた家占つて　二竹
雨露をしのげるだけの借家なり　双葉子
義理堅く長屋に馴れて子　澤山　伴内
眞法に暮し借家で身を終り　光路
榮轉にはや友達が借つてくれ　失名
晩年の父借家にて淋しがり　さゝ舟
煙突の下に平家の一長屋　虚白
二人へ思ふ借家が見あたらず　一蝶
借家とはいはず遊びちとお越し　水聲
標札の幅だけ白く空てゐる　光哉
上般を敷いて借家の春を待ち　亭助
借家から借家へ巡査面白し　吐露樓
恩給の借家で死んでゆく氣らし　綠之助
小春日に隣りの間敷尋ねられ　惡源太
新婚のアパートに居て留守多く　木三
借家人小作爭議の型でゆき　同
法律を知つて、借家氣が強い　町二
月末のたんび他人の家を知り　同
家主は他行差配はきいて置く　源坊
横町は家主の塀を見るばかり　同
借家いま夕餉の煙立ちのぼり　鮎美
出世して歸り借家の門低し　同
長男に借家住ひが氣に入らず　柳秀
頃合の借家を出入たのまれる　同
裏は濱不便ながらの家を借り　萬よし
公園に近く偶居のはげた札　同
借家から朝の陽影を踏みしめて　翠峯
學成らず借家で母と二人きり　同

佳吟

引越してこんな借家をうれしがり　綠之助
金熙借家の雨が音を立て　町二
お隣のほゞよいゝともきく借家　琴人
借家人家主へ癪な氣がそろひ　我卵堂
天井のしみも借家の二十年　萬よし
引越して店子ラヂオを思ひ切り　柳秀
家主には氣まゝな店子とゝか見へ　同
(人)社會主義だなどと家主の耳へ入り　綠之助
(人)借家のみにくさ包む看板　水聲
(地)家主とは別な心で火事に遭ひ　高峰
(天)一枚の襖動かぬまゝに住み　さゝ舟
(軸)いゝ店子朝顔の蔓伸して居　春三

冬の御用品
あれしらず

御代乃花（みよのはな）

本舗　伊藤大一堂
發賣　高橋盛大堂

到る所の藥店化粧品店に販賣す

月評（前號）

紋太　山雨樓
春三　萬よし

近作柳樽紋太提出

お白粉をつける暮しでないのなり

露斗

紋太―兎に角面白い句ですね、持って廻つた表現に讀む者をして考へさせる餘地を與へてゐる點が快感を覺へさせます。私の考へではこのヒロインは白粉をつけてゐるんだと思ひます。つける暮しでないのにつけてゐるんでせう。そこに物悲しい想像を起させます。實笑婦か生娘か、人妻かそれは何うでもよろしい。うら若い女性に纏はるローマンス、そこまでの暗示は與へられてゐます、がその先は朦朧としてゐます。けれどそれ位でもよいのでせう。

春三―この句は近代の世相を描いたものだと思ひます。不景氣が身にしみてゐるから虛榮心が反比例して高くなりつゝある社會相を諷刺したものと思ひます。この女の職業はこれだけでは分りませんが、私には私娼等にはされません。女事務員でもしてゐる娘、またはたゞの娘を描いたものに思はれます。尙この人は白粉の句を四つも連作してゐますから……つまり白粉の題詠ですから あまりに深く考へてゐなかつたかも分りません。然し白粉四句のうちでは一番背景を持つてゐると思ひます。

萬よし―座五のないのなりが川柳の面白味でないにもかゝはらずといふ意味を「の」の一字に要譯した點が嬉しい。句意については

紋太、春三兩氏の說に共鳴します。

紋太―つける暮しでないのなり、と云ひ放したところに少しく嗟嘆めいた感じをうけさせます。そこがよいと思ひます。併し內容の表現が直接でないだけに、持って廻つてゐるだけに些か不徹底な點を不滿に感じもいたします。

春三―「ないのなり」は萬よし氏說同感ですが、唯無闇に使つてはならない調子です。尙こゝではやゝ嗟歎よりは諷刺に使つてあるのではありませんか。

紋太―諷刺にも取れるやうです。それは讀者の讀む時の心持で變るのですね、自嘲にも取れます。そい方の氣持が強いやうに思ひます要するに持って廻つてゐる表現が崇るのでせう。

才藏の藥賣ひに太夫行き

毒仙

紋太―こんな句は如何思ひますか。

山雨樓―僕は、こう言ふ句は人生味を持つてゐると思ふのですが、川柳家であるから言はゞ內容の面白さに引かれ易いけれど、夫で幾度か讀直して詩的に味ふなれば大した感激を與ふる句ではない樣にも思ふのです。只そこに、所謂川柳味と言つたやうなものに釣込まれ或面白さに川柳家なるが故に一層面白く感ずるといつたやうな句であつて、事件的に或る人生を描き出してゐますけれど、面白さの以外に大した感激を覺えない。勿論川柳家としてこの句を詮じつめるならば或る氣分はあらはれてゐることは受取られますがつまりそれだけのもの、それ以上にあまり內容がないやうに思はれるのです。つまり面白さの起つて來る源が この二人のこうした役々の對照を思ひ起すから面白さといふことに於ては一層引づられる點が多いけれど作者のこれから受けた深刻の感じは更に感

じられないやうに思ひます。

春三―僕は反對の意見で可なり面白い句だと思ひます。吾々が常に才三とか太夫とかいふものを見て居て、あの面白さの中に藥といふやうなものを像想さへしないやうに思ふのです。で、こういふ處へ全然この萬葉のふんいきに藥といふやうなものを持つて來た作者の腕を認めたいのです。それから作者のこの句に對する態度が從來の川柳味でなしに何かこう言ふ世界の裏面に特殊な眼を働かして職業から來る哀れさを感じ、又そこに同情を持つてゐるやうな處があるやうに思ひます。一寸見ると才藏と太夫との對照が舊來の川柳家の題材にしたがるもののやうですが、作者はそれに滿足せず可なりよく觀察してゐると思ひます。

紋太―僕も春三君の説に同感します 一寸見ると可笑味の多い句ですが、よく讀むと只の可笑さでなくその奥に哀れな涙が含まれてゐると思ひます。この句が只可笑しさとか、その奥の涙とかをうまく言ひあらはしたと言ふだけでなしに、充分に實在性があるといふのが、この句を本當のものにしてゐると思ひます。山雨樓君は今迄の川柳味といふものにふれることを非常に恐れて、寧しろ恐れ過ぎてゐるやうに私には思はれます。それがあまり強くあらはれる時には 句を味ふ境地がせばめられはしないかと思ひます。

それから序ですが、この近作柳樽の應募者の中に、或は、題詠をやつたり故意に作成したりする人もあるだらうけれども、僕等の受取り方は、純眞な創作として眺めたいと思ひます。皆そのつもりで觀賞する必要があるやうです。

山雨樓―私はネ、つまり發育中にある子供がすべての自然のめぐみを素直に受け入れてどん〳〵と育つて行くやうに、比較的初歩な川柳家が社會の事相に對して所謂川柳味的なことを表現することに何等遠慮はいらないし、兎や角言ふべきでないと思ひます。

併し乍ら觀賞者の地位には創作に劣らぬ純眞さで直面せねばならぬ 吾々の本當の心持を言ふなれば、吾々の心持の全面的な批評でなければならぬと思ふのであります。それがもし假に、比較的初歩川柳家を厭かせない程度に於て その句のいゝ點を述べることは自分がその川柳に直面しての全面的の心持に當てはまつてゐない場合があると 思ふのです。

つまり僕の心持ではこの場合この句は既に毒仙君の句ではないのであつて、自分の創作として其の創作態度の全豹を突き詰めて見なければ滿足出來ないと思ひます。それでこの才藏の病氣になつて太夫が藥を貰ひに行つたといふ客觀的事實を見出したことは、川柳家の腕かも知れない。そうした事實を川柳家の鋭敏な頭で眺めやうとすると そこに面白い味ひが出て來ると思ふけれど、そうした事實の發見といふ外に、作者の愛感激とかいふものゝ鋭敏な働きを見付け難いやうに思ふ。川柳はこうした事件的な面白さを考へ出すといふのは、どうもまだそこに本當な藝術的純眞さが疑はれるやうに思はれます。假にこうした事件に吾々が、直面した場合に單に其の事件の表面より もう少し突き進んだ太夫か才藏か、どちらかをあるフレッシュな處深刻な處に、人間として藝術家として對しなければならないと思ひます。

勿論、句の良さといふことにはこの毒仙君の句の中でもすぐれてゐますが、只これをよいとか、わるいとか言ふ立場から見ると決して悪い句とは思はないが、觀賞のための觀賞にあらずして觀賞は自己の全的表現であり、より純眞なものであることに氣付いたれば、この句がもたらした藝術味に對しては 大した賞讃を與ふることは出來ない。吾々はもつと〳〵事件にしろ人生にしろ、深刻に觀察して川柳的表現の向上を計る 必要があると思ひます。それが只に表現上の問題でなくして創作の心持ちの上から殊にそう思ひます。そうした深刻さに突き進まない川柳は 所詮作ることに終るだらうと思ひます。

なほ併し、十七字川柳の短詩形に於て今のやうな言葉が無理であるとすれば、どうはれない藝術的良心から詩形の改革といふたやうな處まで進まなければならぬと思ひますが、それは可なり大問題と思ひますから もつと〳〵研究さして貰ひます。

春三氏―山雨樓氏の説かれる處にも 一理はあると思ひます。併乍ら山雨樓氏は從來の川柳の缺點を非難せられる餘り、却つて從來の川柳の悪くない部分までも 否定せられて居

る傾きがないでもないと思ひます。尙深刻な藝術味といふことは、勿論僕等の要求する處でありますが、あまり深刻にとらはれ過ぎて且小主觀に囚はれ過ぎると思想が、藝術化せずして生まのまゝ發表することがないでもありませぬ。殊に最近の傾向として私川柳が非常な勢を以て殖へつゝありますが、私の考へでは、自分の思想は思想そのまゝでなく或る自然なり人間の現實に際して具体化されなければならないと思ふ。即ち此句について言へば作者が、才藏對太夫及病氣についての事件的興味といふよりは作者の持つ特殊な寂しさがこの現實に當つて表現されたものと思ひます。山雨樓氏の見方の中にはこの句を見たと同時に、從來の川柳味といふものにとらはれ過ぎて更に深い處を見てゐない處がありはせぬかと思ひます。

併し乍ら山雨樓氏の說は、從來の一部に川柳家があまりに享樂的なあまりに又輕い川柳味に偏し過ぎたものに對して考へるべき眞面目なものがあるやうに考へられます。

紋太―僕は山雨樓君が從來の川柳味を恐れ過ぎて、それがために あまり固くなり過ぎはしないかと思つたから、一寸言つたんですが、從來の川柳味といふよりも川柳臭味といふべきものを恐れることは僕も同感でありますから、理論としては山雨樓君の御言葉に少しの反對もありません。批評が横にそれますから、こうしたことは未だ始終ぶつかる問題ですから、その時に讓ることにしませう。

私のこの句に對する批評は前に言つた程度です。

川柳塔　山雨樓提出

水仙と其の影がもつ曲線美

杏　二

山雨樓―私は此句は一見して說明かと思ひました。然し味はふほど纖細な自然の優しさを充分に汲取つてゐると思ます。單に水仙の曲線美と言つた中にも、やはらかい感じが出てゐると思ひますが「其の影がもつ」といふ中七の表現が單に見付けどころがよいと云ふだけでなく、自然の尊い姿を眞實に詠んだ香りの高い川柳と思ひます。所謂純眞な心持があらはに出て、人の心にまでふつくらと共鳴さすことが出來る句と思ひます。自然の見方なり句を詠むといふ心持に於て その純眞さに思はず惹きつけられました。

春三―此句の生命は山雨樓氏の言はれた點だらうと思ひますが、曲線美といふのは稍や說明ではないかと思ひます。美と言はずして美を表はすのが川柳家の優れた表現であつて此句も若し「水仙とその影がもつ曲線」と直してそこに美が表はれてゐたなら「曲線美」といふより「曲線」と打切つた方が價値が多くなりはしないかと思ひます。尙ほ句の意味は以上の通りですが、私には山雨樓氏ほどに此句に惹付けられなかつたも少し川柳には動的なところが欲しいのです。

紋太―言ふことがありません、そんなところですな。

山雨樓―下五に就いて言つて頂けませんか。

紋太―下五に就ては、僕も春三君と同じような考へを持つてゐます。此句の批評は山雨樓君の批評が親切な批評です。然し僕も春三君と同じく自分の欲望がこうした靜かな美しさだけでは、僕の心を打つ力が弱いと思ふ。それは只僕の欲望から言ふので靜的だからわるいと言ふのではないのです。

山雨樓―下五の「曲線美」といふ言葉は「美」といふ字があるから之が美しい事を說明したことに取られるのは無理からぬことではありますが、一句をすうつと讀み下した時に「美」といふ字がさまで妨げにはなつてゐないやうに思ひます。のみならず味はつてゐると可成り撰まれた言葉であると思はれます。それからも一句が餘り靜的であると云ふことに就ては御尤もに思ひますが、作者の自然に對する心の持ち方は可成り鋭敏に、つまり心の働きは縱横に働いてゐます。一本の水仙が如何に深く作者の心を捕へたかと云ふことに就いては、之は單なる情景を寫したといつたやうな靜的なものではなくして、作者の純眞な感情が動的に而かも深刻に歌はれてあると思ひます。

紋太提出

商賣を始め子供をよく泣かし

炭　車

紋太―此句は小さな商賣を始め、忙しいもんだから、子供に手が廻らず泣いてゐる儘にしてゐるといふ意味の句でせうが、可成りさうした小さな商賣を始めた煩はしさが出てゐます。私はこうした句を見ると世渡りの複雑な氣分を味はせられて或る物を考へさせられます、それで此句は私に取つては良い句だと思ひますが、たゞ一つ表現法が低調といふ非難を與へられるかも知れないと思ひます、けれども私にはその低調さが少しも非難する氣にはなれません、山雨樓さんが一番非難されるだらうと思ひますから、山雨樓さんの御意見を承はりたいと思ひます。

山雨樓―私の心持では前の毒仙さんの句に對しての心持で云ふならば、多少あきたらない點があり、又餘り川柳の常套的道筋を歌つてあるやうに云ひたいのですが、寧ろ前毒仙君の句と反對に題材がより多く人間味を帶びた中から或る面白味を捉へたところに、作句衝動に於て眞面目さが多いやうに思ひます、こういふ題材に就いては可成り皆がよく氣付く點でありますし、人間生活を眞つ向から眺める態度に何處までも共鳴したいと思ひます、たゞ紋太さんは句の低調云々といふことに就いて或る懸念を持つ者があるだらうといふお話ですが、私は此句に就いて泌々と詩なり藝術なりに就いての難かしさを感じました。或は低調云々といふことの問題になるかも知れませんが、句の表現上なり感じ方なりに就いて尤も洗練する餘地が殘されてゐるのだらうと思はれます。

春三―大變地味な句だと思ひます、此句は素人が小賣商を始めて、兎も角も非常によく賣れてゐるといふ喜びを表はしたので、子供を泣かしてゐるのが煩はしいのではなく、何か商賣の繁昌を喜んでゐるところがあると思ひます、こういふ地味な句境は私達がよく見脫すのですが、作者は理屈に走らずしてよく現實世界を地味に觀てゐると思つて、私には敎へられるところがあると思ひます。

紋太―春三さんの言はれるやうに商賣が繁昌して嬉しいといふ氣持には受取れませんが、私は此句を讀んで兎に角人間が生きる爲めには いたわつてやるべき子供をいたわることが出來ないで、商賣の方にかゝられればならないといふ、その苦勞を感じるのでそこに人生の味はひが出てゐると思ひます。低調でないかと云ふ案じは實は私自身が持つてゐるので、それが川柳としては許されてゐるとしても、他の短詩に比較して表現の上に輕侮を受けるものがあつてはならないと常に思つてゐるからであります。

（琴人・萬よし・蓋馬筆記）

總選擧川柳

三好車郎

大阪第四區から出馬して落選した酒井榮藏氏の應援演說に行く

親分の爲めと提灯持ち歩き
中立は政民無産ぼろくそに
口合ひで候補の名前覺へさせ
ムツソリーニまでが應援してるやう
演說の濟んだ會場寒いこと
風邪ひいて候補の聲の小さいこと

福岡縣第四區から出て當選した前廣島縣知事末松偕一郎氏の應援演說に行つた青本前鐵道次官と一緒に演說して廻る

肩書が光り演說よく聞かれ
大將を助平爺にしてしまひ
前知事をもう大臣と賞めあげる
場當りの演說だけが受けてゐる
前次官演說すると横になり
警官の注意々々を聞き流し
政友を惡魔のやうにけなしつけ
演說をさせぬとすれる辯士あり
演說のタネを話せば間違へる
候補者の頭だん〳〵低くなり

開票の結果を新聞に發表する爲に三日間といふものは文字通り眼の廻るやうな忙しさをした。

當落を笑つて話す新聞社
二票でも多いと笑ふ淋しさよ
盲人に頭あがらぬ四六五
紡績と政治は別と分り過ぎ
政民のどちらが勝つと賭けてゐる
犬養が落ちる落ちない騷しさ
大山を落したことを口惜しがり

卯木先生の逸話

蛭子省二

今井卯木先生の地位及貢献に就ては、餘りに著明の事實で今更説くの要はない。卽ち先生は全部が交りけなき川柳詩そのものであつて、年來の病と闘ひつゝ輕佻薄志の徒を叱咤され、正しき新しき詩の組織に向つて、床上輾轉の苦悶を嘗め、尙ほ且つ筆を棄てられず。新編の川柳江戸砂子九分の完成に到つて、瀘焉白玉樓中に入られた。維れ昭和三年一月三日の事である。稿の完成なかりしは最後の垂訓だと思ふ。これを繼ぐ純眞なる川柳人の輩出を希願されたので、決して一個の著述にのみ繫がつて居る問題ではない。

私は窓外白雪に淸められた一日、香を炊き天眞流露たる溫情の指導を追憶して、二文を草し今此の一文に思ひをはせて、先生の側面を窺はむと欲する、斷腸の情筆意の如く運ばず、後日再記して尊崇の禮を厚ふしたい。

先生の號

先生、名は幸吉

卯木—柳である

椎木庵—古句にある椎木が新川柳時代當初にはどうしてもわからなかつたもので、先生の御研究發見に因つた。多分それ以來用ゐられたものではなかろうが、私の憶測に過ぎない。

鳥亭—明治二十一年鶯亭金升氏の門に入り、春升と云ふ名で都々逸を作られた。

機調—老鼠堂機一の門で、賓文居といはれた。

啼血—少年文庫時代。

これらの印影は私への書翰中に捺されてある。私が多少鐵筆を弄する處から、依頼を蒙つた事があつたが、先生のものを刻む程の自信もなく遠慮した處、諸君へも斷られると云ふ事は知つて居るが兎も角氣のむいた折り是非頼むと再度申越された。遂にそのまゝになつてゐた。處が昨春椎木庵で横濱川柳家が集め私の歡迎句會を開いて下さつた座敷の額が、久良岐翁の筆でその側の朱文印が、よくみれば『久良岐社紀念日句會』と云ふ私のイタヅラ物で、刀がなくナイフで間に合はせたもの、冷汗を催しつゝ告白してしまつた。先生はアノ座敷で安らかに眠りに就かれたのではないかと想像して居る。

先生と音曲

先生は酒豪でもあり、趣味は廣く、所謂道聽塗説の口耳の學ではなく、軀を以て研められた。

「一中節と河東節は二ヶ年程、稽古致したる位、新内節は聞くのも嫌ひ故、新内節の處を書く時には困り候、新内の好きは節でなく流しの三味だけ」

砂子御執筆中に河東の逸事を申上げた際の返書の一節、淸元歌澤を愛せられた。

先生はフランス生活をされた關係上佛語は非常に巧で從つてフランス歌舞踏にも長じて居られた。明治三十九年『舞踏』の題で投吟頗る少かつたのに、選者としての先生の作は

三鞭に醉ふてカドリエ縺れけり
壁の花ポルカになると立ちあがり
舞踏室クル〳〵〳〵と渦を卷き
奏樂がやめば舞踏の間が拔ける
慣れぬのは相手の裾を蹈みたがり

これを久良岐翁が評して『新風俗詩家として舞踏の佳句無きは見聞狹しといふべし。卯木君は舞踏通佳句口を衝いて出づ、人は修養せざるべからず』と。ダンサー營業停止の今日と對照して今昔の興に耽る。

先生とおすし

ヘッツイ河岸の頃の折り、笹卷鮓の古句が一つ見つかつたので、お加へになつては如何と申出た時の御返書中に

「笹卷鮓は小生には鮓といふ感じが不致候、今でも金曜又は土曜には必ず鮓を食べ居り候、震災前は一日置きに屹度横濱名代の梅の鮓へ參り候。好きなものを握らせ握るのが間に合はぬ位に口へはふり込み、歸りがけに一寸暖簾で指の先を拭ふ處に、鮓の味以外の味有之候故、皿に盛りたる鮓は死んだ金魚を見るやうな心地が致し候、喰べては美味に候へ共笹に卷いた鮓は鮓らしき感じが不致、菓子のやうに思はれ、御殿女中など上品な人の喰ふものがと存居候、殊に近年シンのある飯などにて握つたもの有之、昔め聲價は無之樣に被存候」

笹卷鮓評は全くそうで、私共夫妻は大震災後青山の出店によくいつたものだが、シン入を喰はせられて澁面した、アノ甘味はいつも欲しいと思はせなくなる。昔の芝居見物には珍重されたものであつた。

昨年行脚を終り東京を引揚げむとして、最後のお別れに先生の書齋で御夫人と晝食の御馳走に預つた。種員の火鉢に柳亭茶寮とこうき文字の種彦愛玩の小さい鐵瓶から、湯をそゝがれる茶碗の御飯は、先生にはカタくはないかと思つたが、お鮓好き丈けに、おいしくおかはりを重ねられた。

先生と書物

新聞が配達されると、書籍の廣告欄丈けを目通しされ、江戸に關するものは直に求められた。御夫人の不在は本屋行の用件のみであつた。大阪時代の珍書は預つた友人が賣却してしまつた事を、常に心惜しく語られたが、倉庫には參考書が積まれたまゝ震災の爲め半ば整理する事が出來ず、その健康がないのである。然し新書齋の一壁は新古の書物整然と列むで居た。

「川柳詩五號と十號缺號の御樣子には別封にて御贈り申上候、之を探す時計らずも花街沿革誌、日本賣笑史、俗曲評釋五册を發見仕候、花街沿革誌の四十錢の正札珍重すべきものと存候、江戸惣鹿子端本一冊には候へ共二十年前東京在住の時三錢五厘にて求め、之も正札が其儘殘り居候、今は全部揃へば二十五圓以上の由に候」

「參考書類の乏しきに閉口、新古文林增刊實錄全集其他二冊（定價十八錢宛古本にて五錢位で需めたるもの）を從吾好社より二圓にて買求め候、實錄よりも講談本を讀む必要有之、讀むのと書くの

とで多忙に候」

書物關係の通信は澤山來てゐる。講談本も隨分讀破され句釋に新味が加はられて居る。

先生の作品

先生には卯木句抄がある、其後の作品は必ず手控はがおありの事と信ずる。昨年『皷』誌へ『卯木さんの句』と題して句抄から拔いて感想を陳べた。先生の句風は更に技巧を弄せず、自然に流露して情趣の根強さがある。

「本年に入りて小生が俄かに作句するやうに相成候故定めて不思議に思はるる事と存候、實は餘り作句に遠ざかり候故、泥を吐いて仕舞ふ積りで、陳腐にてお目に掛るは汗顏ながら、みやこ、鯱鉾よのころ、へは毎號投句する事に致候、氣の向いた時感興の湧いた時に作らんかと存候へ共、ソレでは何時まで出來ず候故、今年よりは一日一句必ず其日の日記の終りへ認める事に致居候、さうすると興が起つて一日に五句も六句も出來る事が有之候」（大正十四年四月十八日）

今當時の作を少し揭げて置き度い。

子を抱「あやめ」の烟横へ吹
お隣の普請を呪ふ鎚屑
初袷火鉢を隅へ片け付る
古帽子探しあぐんだ切符が出
霜解にやすい家賃の譯が知れ
亭主とは一ト桁違ふお小遣
選者吟は必ず咏まねばならぬと云ふを原則にして、主張されてゐた。句會の披講は幹事がやるのが慣例であると申された事があつた。

損料の蒲團と知らぬ里の母
生き殘る金魚天水桶へ入れ
ピアニスト後ろ姿に念を入れ
赤切符もう隣りから話しかけ
利子だけで喰ふ胸算に寢られ
値切らずに買へば古着屋顏

先生の逸話

先生には確かめる要がなかつたから、一度もお尋ねはせず、又先生も曾てそれを口にせられなかつた一事がある。之れは久良岐翁から十數回の通信も來て居るし、東京で幾度も直接承はつたから全く事實であらう。

或會の流れが向島百花園となつて、其席上で先生が翁の頭上に鐵拳を下されたのであるそうな。

私は此の事の內容經過如何を知り度くない。先生は熱情漢であり、紳士であり、詩人である。單に酒の上で年長者の頭を叩いて快よしとすろ程無意味な興を悅ばるゝものとは信ぜられない。私は臨濟打翁の拳を知つてゐる、全く之れ先生の面目躍如たるものがあると思ふ。

黃檗云はく、作麼生が言の漢の來ることを得ん待つて痛く一頓を與へん。臨濟云く、何んぞ來るを待つてと說かん卽今便ち喫せよと、いきなり黃檗の面をなぐつた。禪ではこれを最大孝行最大謙遜と云つて居る。

先生を臨濟にし翁を黃檗にして機鋒の峻烈、研究の面目を透得したならば、分外の皎潔、分外の詩情がみなぎつて居る。これ川柳味の不壞の至極ではなからうか。

◇

最後に一言添ひ度きは、俳聖子規は一生結婚せずして今も健在なる令妹の看護により使命を全ふされたのである。わが卯木先生も亦御夫人の献身的奉仕に因り、幾度も最後の注射から蘇がへられて、高邁なる俳想に精進致された事は、牢記せねばならぬ。（二月五日謹記）

川柳的漫談「タラ」（二）

川上三太郎

ホネムーン以來銀座で買ふときめ

三太郎

斯ういふ家庭は我々泥棒の能力を、存分に發揮する事が出來る最も理想的な家庭である。それからその次ぎに、我々泥棒の最もよいお得意様は、パパさんママさんの家庭である。これも我々泥棒に取つては、まことに有難い家なのである。斯ういふ家庭は必ず貧乏人を輕蔑してゐる。從つて彼等は金を非常に尊敬する尊敬するといふよりは寧ろ信仰するのである。だから彼等は今まで貧乏人の前でニヨツキリ突立てゝゐたアタマを、金といふものゝ前には米搗バツタのやうに下げる。彼等は金持か羨ましい。ごつかして金持になりたい、せめては金持の眞似だけでもしたい。そこで先づ言葉を改める。これは費用が要らなくつて直ぐ實行出來るからだ。即ち如何にも金のありさうな言葉に改める。自分の倅や息子も杢左衛門たの三太郎なぞといふ名前は早速改める。一寸見ると支那の手づまつかひか朝鮮の妓生みたいな名前に改める。さうしてお父さんをパパさん、お母さんをママさんと呼ばせる。但し斯ういふ家に限つてセンチメンタルで、ヒステリカルで、女大下である事は勿論である。

パパさんと亭主を呼ばせ子を抱かせ

林中

まことに彼女の亭主こそいゝ面の皮で、彼は恰もお祭の山車を引ツ張る手みたいな顔をして、彼女のあとをノコ〳〵ついてゆく。然しながら此のパパさんと、此のママさんの間に挾まつてゐる子供は割合に無邪氣である。子共には嘘の心がない。子

供は何時も本當の生活を、その儘かたちや言葉に現はしてゐる彼及び彼女が如何にパパさんたらんとし、又ママさんたらんとしてゐても、子供は依然として李左衛門であり、三太郎である或る時小さき此の自然の子は、銀座の華やかな百貨店の食堂で彼の美しいママさんに斯う叫んだものである。

『ママさん、けふは牛肉屋のコロッケぢやない本當のコロッケを喰べるんだね』

まことに子供は神樣である。然も彼は最も無邪氣なる惡魔である。

冷汗をかゝせて子供あどけない　○丸

此のパパさん、カフェの女給には『先生』と呼ばれ、此のママさん美顏術の内弟子からは『奥さま』と敬意を表されるが、彼等は親子三人でしやぼん箱は一つしかない。鏡臺は光つて居るか椽側は光つて居ない。ヘヤーピンは抱へて打棄する程あるが、お客へ出す割箸は何時もお向ふの支那蕎麥屋から貰つて來るのである。或る時此のパパさん、ママさんに曰く

『僕は昔から義太夫と、長唄と、常盤津と清元といふのは、何處に區別があつてめいくゝあゝ違つてゐるンだか、一寸も判らなかつたんだがね。今日やつとそれが判つたよ。あれは君、みんな見臺で區別かしてあるんだぜ』

『ケンダイ？ケンダイつて何？停車場？』

『冗談ぢやない。本立ての事さ』

『あゝ、それぢや何時か社長さんの園遊會の時、乃木大將と車夫の話といふのをやつた藝人が使つてゐた、あれでせう!!』

『さうだ。あれが見臺さ』

『ヘエ、すると義太夫でも矢張り見臺を使ふの？』

『使ふさ。此の頃はみんなハイカラになつたよ。何しろ義太夫と長唄だけなら、見臺だけ見りや一目でそれと僕には判る』

『まあ、隨分あなた通人ねェ』

天下はまことに泰平である。泰平ではあるが不注意だらけである。殊に月給日の晩なぞは就中不注意だらけ、油斷だらけである。もつとも此のパパさんの如きは月給日の當日は會社に居る中から嬉しさうな顏をして、晝飯の代りに餡パンを食ひながら緊張してゐた男である。

どうしても顏に出て居る月給日

柳司

我々泥棒は斯くの如き家庭へは遠慮なくしばゝく訪問するのである。然しさう言ふやうなものゝ吾輩は、世の中の全部のパパさんママさんが、悉く右同斷であるとするものではない。たゞ人造パパさん、僞ママさんが斯うだといふのである。本當のパパさん、ママさんは、決してそんなものではない。油斷もしなければ不注意でもない。第一彼等は殊更に自分の子供にパパさん、ママさんなぞと呼ばせるやうな事は決してしない。子

供は生れたまゝの李左衛門であり三太郎である。けれども〆な上品で愉快で且つ健康である。決して百貨店の食堂で本當のコロッケなぞは喰べたがらない。從つて彼等は一家殘らずで外出しても、その戸締りは頗る嚴重で行き屆いてゐる。必ずいち〳〵敷居には釘を差し込み、近所の人たちとお互に相呼應して共同戰線を張つてゐる。だから一方が外出してゐる時は、他方は必ずその留守宅を、我が家のやうに看視してゐる。かゝが故に我々泥棒が一寸そこの處を覗いても、直ぐお隣から

『だれだ？』

と、大きな目玉をした顏が出る。これではどうも仕方がない。それに又さうした家に限つて、たとへば現金といふやうなものは、決して必要以外には家へ置いておかない。妻君の小出しにしてもいち〳〵郵便貯金にして置く。然もその貯金の通帳と印鑑とは、必ず別々に仕舞つて置く。全く手も足も出ないのである。

節穴が斜で額が草疲れる　きん坊

つまり草疲れるだけが損である。いくら努力をしても無駄である。從つて斯ういふ家庭は朝もきつちり、如何にも健康さうに食卓へ就く。また斯ういふ家庭に限つて、何も月給日だからと言つて特別に緊張もしない。その代り月の二十日過ぎになると子供が無精に、牛肉を戀しがるやうな事もない。まことに我々泥棒にとつては禁物な家庭である。だからさういふ家庭はたとへいくら大きな節穴が幾つ開いて居やうとも、決して覗いて見る必要はないのである。つまり我々泥棒には全く緣のない無關係な家庭である。彼等こそ本當に天下泰平である。

佛の姑口開いて寢る　雀郎

これを要するに油斷のある家庭、不注意な家庭こそ、我々泥棒にとつて全くの理想國である。就中その最も理想的なものは、何と言つても留守宅である。空巣である。確實なる空巣はそれが確實であればある程、我々泥棒の勞力は最小でいゝからである。ところでそんな確實なる留守宅、理想的な空巣、そんな家は何處にあるゝなか〳〵滅多にはあるまいぜといふ議論が出るかも知れないが、然し決して絕對にないと斷言は出來ないのである。たとへば現に今夜吾輩の此の手帳を愛宕山の頂上で朗讀してゐる男、その男の家の如きは、最も確實にして然も理想的な空巣である。如何となれば尠く共彼は今夜の七時二十五分から約三十分は、最も完全にして且つ確實に留守である。然も彼は獨り者で、近所づきあひの極めて惡い男である。近所づきあひの惡い獨り者が、愛宕山でラヂオを放送してゐる位、世に完全にして且つ確實なる空巣は先づあるまい。此の千歲一遇

再び來らぬ絶好の機會を何で吾輩か逃す事をしやう。諸君、吾輩は今夜七時二十五分を期して彼の空巣を襲ひ、最も安全第一の中に、約三十分愉快に仕事をする。その結果は再び此處へ取つて返して、諸君の酒杯の未だ冷めぬ間に親しく實演して諸君のお目にかけやう。要するにこれ最も小なる勞力を以て、最も大なる効果を擧げる最も理想的の行動である——。

計劃の思つた通り懷ろ手　三太郎

○

手帳の文句はこれで終つて居ります。然しこれで見るとごうやら私の家へ、目下泥棒が忍び込んでゐるやうであります。目欲しい物金目の物を一纏めにして、みんなさらつて行くやうであります。まことに私に取つては大下の一大事で、私は直に眼の色を變へて、大急ぎで韋駄天の如く、我が家へ急行しなければならない塲合であります。けれども實際のお話を申し上げれば、私はゆつくり安心して居ていゝのであります。と申しますのは、實は今朝早く私は、あすこの家を疊んで仕舞つたのであるからであります。何しろ生來の怠け者の私に、天罰こしてやつて來ました年末の苦しさから、私は今夜此の放送が濟み、次第上野から金澤にゐる私の先輩の許へ、實は八時半の急行で東京を逃げ出すつもりなのであります。從つてあすこの家には何もありません。なけなしのガラクタもみんな今朝來た屑屋に賣り拂つて仕舞つたのですから、今は麥酒瓶一本すら殘つては居りません。たゞそこにはごうも氣味か惡かつたのでその儘にして置いた例の大きな細長いタラが一尾。依然として消極的に、益々哀れつぽく、愈々炬燵を取り上げられおぢいさんみたいな顏をして、悄然とブラ下つてゐるばかりであります。ですから結局此の泥棒は仕方がなしに、あの大きな細長いタラを擔ぎ出して、今頃は吃度表へ出てゐる事でせう。さうして行く水の如く流れ去る昭和二年の、最後に近い今夜の雨に濡れた町を、慌しく行く歳晩の人々の中に交つて、彼も矢張り如何にも鹿爪らしく、忙がしさうな顏をしてスタ〳〵歩いて居るに違ひありません。彼はもう忘年會へは行きますまい。勿論實演も致しますまい。要するに彼も泥棒の故障車だつたのです。然し今夜程彼は交番の前を平氣でゆつくりと通り過ぎ、警官の顏を世にも賴もしく眺めた事はありますまい。今夜の彼は何時もの彼とは違ひます。それは聊か物足りないでせうけれども今夜はすつかり安心して歩いてゐるのです。何故かと言へば今夜の彼は、自分のタラを自分の背中へ、自分で擔いでゐるのですから——

…(おはり)…

各地柳壇

川柳雜誌社 二月例會

本社二月例會七日午後六時から端の坊で開催いたしました。かなり寒い晩ではありましたが熱心な方々が多數に來會され、すこぶる賑やかな會でした。會場が狹いためにいろ〳〵不行屆な點が多かつたことを謝します（二柳子記）

路郎、革郎、素人、武子、松郎、琴人、源坊、翠峯新水、双葉子、風柳坊、百雷、幸泉、文蝶、鳴玉鮎美、秋風、富美夫、雅流、十紫、春三、松山子さゝ舟、觀月、葉平、狸庵、彩秋、久郎、燕柳、悟郎、冷笑、千沙、三次、山花紅、一醉、鶴峯、呑陽鬼三、信かず、天眞、遊狂、愚陀、柳骨、始彦、亂耽、刀三、青蛙、迷亭、太閤、漫酒樓、文久、波郎、參郎、青歌、九柳、孤舟、虛白、陽喜亭、露斗、蒼梧樓、惡源太、武藏坊、耿三、享三、流西、翠川佳山、炭車、加香、ひろし、萬よし、二柳子

資本家　路郎選

資本家の慾は嫁入まださせず　眠聲
金がもの云ふと資本家醉ふて居る　同
資本家の疊の上で判を押し　波郎
うなづいてゐる資本家の儲けて居　同
泣き落すつもり資本家又も留守　百雷
資本家へ貸せ〳〵〳〵の日が續き　同
無條件ならと資本家そつけなし　素人
警察へ早や資本家の手が廻り　同
マルクスを讀む資本家の息子にて　狂三
資本家の方が彼女はよいと見に　耿三
米のなる土地を資本家また減らし　源坊
お辭儀だけでは資本家の承知せず　鮎美
小切手一枚で貞操を買はんとす　同

その意氣でやれと資本家出と吳れ　秋風
爭議から又血壓があがつて來　十紫
理財科を卒るとブルの弟子になり　加香
資本家の妻面會におびえたち　革郎
資本家に思想の違ふ子が肥り　柳骨
資本家へ貸してやりたい智惠を持ち　同
資本家の犧牲となりし妻若く　流星
忠實な無能力者を表彰し　蒼梧樓
俳句が流行る資本階級　亂耽
資本家を訪へば茄子をたいてくれ　萬よし
資本家の悲哀啞の子が一人　同
資本家の舌にざらつく燒豆腐　松郎
（軸）立て替へるほど資本家能がなし　路郎

洗濯　迷亭

洗濯を賴まれたのが初めにて　人
洗濯に女房の手のいみじくも　佳山
洗濯の中に一枚赤い物　文蝶
無雜作に引つくくつてく洗濯屋　秋風
洗濯もしてあげますと二階貸し　蒼梧樓
洗濯の姉工場が休みなり　千
洗濯屋藝者の家で暇がいり　炭車
洗濯をしてる小僧へ旦那の眼　萬よし
洗濯のついでが殖にる子澤山　彩秋
洗濯屋主人の顏を知らぬなり　青蛙
洗濯をするのを見てる二日醉　青歌
洗ひ物などを留守番賴まれる　耿三
同情をして洗濯の手をやめず　松郎
洗濯をしながら近所の子をほめる　同
洗濯へ氣兼してゐる洗ひ髮　波郎
お妾のたまに洗ふへ湯氣を立て　同
洗はして下さいまして持つて去に　葉平

洗濯科などは科目にありません　同
綿入を丸洗ひする獨り者　同
五客　耿三
盥から離れて小供れだつてる　露斗
小春日の母にせんぐり洗ふ物　雅流
洗濯の土間から亭主使はれる　漫洒樓
洗濯をする間隣の子に頼み　久郎
洗濯屋女給の掛を取り損れ　松山子
（人）洗濯へまだか〳〵と抱いてゐる　佳山
（地）愛の巣の物々しくも洗濯日　燕柳
（天）洗濯の盥と別に水遊び　松郎
自慢　選
親方の自慢水ばなかんで居る　文久
戒めてくれる話しに自慢あり　百雷
靜まるを待つて自慢のうたひ出し　翠川
自慢話へ横槍入れて立ち　蒼梧樓
自慢のなかへけむたい奴が來る　十紫
ごまかした事が自慢の懷手　呑陽
聞きもせぬのに女房が活けたのさ　迷亭
息子から送つて來たと見せに來る　惡源太
自慢するにも考へてゐる　双葉子
鉛筆が折れて自慢はそれつきり　波郎
自慢して廻轉椅子のちと廻り　同
御車の力自慢でないのなり　露斗
自慢のように女道樂　同
自慢したのをいつまでも覺えて居　春三
自慢して居れぬ息子になつて來る　同
見た人があつて自慢の華美になり　刀三
さつきから悴悴が續くなり　同
はな糞ほどの貧乏家をいふて笑はれる　路郎
自慢もいゝが割前をどうする氣　同
（軸）ゆうべの自慢釉口が切れて居る
藝者　互
泣かされて藝者身の上話出し　松郎
藝者から金釘流の文がつき　選
藝者もう古い思想にとらはれず　富美夫
丸髷に結ふた藝者の卷煙草　漫洒樓
姉藝者のろけ云はして貰ふなり　愚陀
影になり日向となつて姉藝者　信かず
島の内あの妓の素顔見付けたり　佳山
姉藝者三味の撥へ疳を立て　陽喜亭
酔ふて來たのへ藝者つかまらず　百雷
知りつゝも藝者のわなにかゝつて　遊狂
學生へ藝者の戀ば眞面目なり　孤舟
藝者もう昔なつかしい年となり　鳴玉
藝者には面白くない話なり　風柳坊
よう賣る妓ほんのり醉うて戻る　文蝶
藝者から身をせまられた世帶なり　耿三
三軒目娘藝者にしたらしい　露斗
藝者ちと訛があつて面白し　武子
逢狀を見てから藝者おちつかず　呑陽
罪な事だけはお止しと姉藝者　琴人
春雨の中を素足の藝者行く　燕柳
いやな會もらひの電話待つてゐる　惡源太
唄はせておいて藝者は用に立ち　三次
失戀の結果がさせた藝者なり　幸泉
姉藝者みんなが唄ふものを彈き　九柳
木當に惚れても藝者うたがはれ　双葉子
爪彈きになれば藝者も愚痴を云ひ　孤舟
兒が一人あつて藝者の悪まれず　武藏坊
藝以外評判になる凄い腕　悟郎
客けむにまいて外らさぬ年增ぶり　山花紅
同

藝者からことづけが聞く寒い晩　太閤
釜ケ崎藝者の知つた事でなし　同
あの人が昔鳴らした妓ですか　革郎
妹の藝妓であるを隱してゐ　同
藝者もう馬鹿にし切つた聲になり　蒼梧樓
金のある話に藝者つつと立ち　同
ロンステップ藝者の足の小さい　亂耿
「知らんかいな」藝者しんぼうれて居る　同
はすかいに藝者火鉢へ寄つて來る　十紫
終點で藝者四五人もつれてゐ　同
朝風呂に藝者疲れを見せている　炭車
荷車が藝者の方へよつて行き　同
藝者を呼べば風に吹かれてゐる　鮎美
湯上りの藝者へ梅が白う咲き　同
氣をかへて藝妓よく飲みよく唄ひ　春三
思ひ出し笑ひを藝者叩かれる　同
弟へ藝者眞顏になり切つて　萬よし
段梯子藝者いゝ洒落思ひ出し　同
藝者なんだか背筋が寒ふなり　刀三
襖から出ると旦那のある藝者　秋風
流行妓今日素人と言ふこなし　同
シンミリと話せば藝者泣いてくれ　同
チョンコ節唄ふ藝者を寒う見る　松郎
寒い暑いことをはつきり藝者云ひ　同
信心の話に藝者手を焙り　同
藝者の眼に矢張りしひたげられて　路郎
偉い人ばかりに藝者呑むのなり　同
藝者自身も顏のことなど忘れて居　路郎
寒うおまんなァと藝者も年をとり　同
散髮　互
散髮の時間浮世を別にする　選
千久

散髪のも一度頭なでて見る　漫酒楼
床屋出ておもての寒い事を知り　悪源太
耳をそる支那人が居る散髪屋　武子
散髪の手がはかどらぬ話しずき　山花紅
散髪屋眠たい頃に又一人　彩秋
小僧皆丸刈にして十五日　千沙
病上り散髪をしに二人連　松山子
散髪屋白毛一本抜いてくれ　三次
丸刈を女房が刈るさんばつ屋　露斗
泣き止まぬ子に散髪屋犬の眞似　燕柳
失恋のそれからオールバックなり　萬よし
丁稚もうオールバックにしてみた　文蝶
散髪のすが〳〵しさに秋を知る　春三
散髪屋恋の頭に刈つて呉れ　亂耽
散髪に空しく過ごす日曜日　悟郎
病上り軽うなつたと床屋出る　虚白
アイロンの心易いは明日にされ　佳山
禿げたのも同じだけとる散髪屋　源坊
散髪屋ふさかみそりのこわさ知る　柳骨
御祇儀の前へ散髪座らされ　久郎
散髪の一人あそこが氣に入らず　幸泉
散髪が濟んで一ぺんあごをなで　翠川
散髪の胸に儲ける事ばかり　松郎
散髪屋長い顔だと思ふなり　孤舟
散髪師今は無言で顔を剃り　風柳坊
湯に入つて散髪をし惚れに行き　素人
晩酌が濟むと散髪明日にする　十紫
頭敷よんで散髪腰を据ゑ　陽喜亭
散髪屋はげへ愛想の櫛を入れ　青蛙
散髪に氣乗な咳が續くなり　麥郎
叱られたまゝ散髪に行きそびれ　秋風

散髪屋咳入る人をもてあまし　耿三
散髪の當座は櫛をあてゝみる　觀月
五分刈りはめくつた様に落ちて　一醉
惨酷な散髪をする二十一　流西
丁稚もう一枚刈りが氣に入らず　翠峯
散髪がまだ歸らない十一時　葉平
散髪は號外讀んで聞かされる　双葉子
我が頭時々變へる散髪屋　波郎
散髪をしてると鼻がかゆくなり　青歌
散髪もせず床に親しみ　琴人
散髪を忘れたやうな詩人なり　同
散髪はしたが的のない卷煙草　鮎美
散髪の眼鏡をふいて釣錢を取り　同
散髪屋鏡に將棋見せてひま　炭車
散髪屋朝顔咲かす腕があり　同
散髪を氣にする女惚れてをり　革郎
散髪をする氣で出たが呑んでゐる　同

（軸）平等に人はくらやみ待つてゐる　久流美

「顔」　五選

一人旅淋しい顔はせぬ覺悟　紅子郎
大丈夫矢張り顔は不安なり　しづか
石蹴つた刹那子供の變な顔　好次
眞剣な顔で米屋を重ふ出る　すみ三
眉を引く手が向ふから來る鏡　好太呂
あきらめた顔もまじつた忌中櫛　旭洋
年頃の先生すこし逸つてゐる　無想庵
古顔が言ひ負けてゐる晝休み　木偶人
顔の立つやうに仲間へ顔を貸し　同
苦しみを隠した父の笑ひ顔　好次
つまらない顔へ母親餅をやき　同
笑顔から皆んな達者な夜となり　すみ三
腹藏なき意見に社長の顔の色　紅子郎
久し振り互の顔に髭も生へ　好吟坊
顔色を讀んでか香具師は強く出る　粗影
意見する父の涙をぬすみ見る　三波子
白粉のむらを見付けて夜は明ける　銀砂子

金槌中　柳二郎選

金槌の音に電話は腹をたて　好次
金槌の音をたよつて町を聞き　粗影
金槌を掘つて大工我となり　すみ三
金槌をたまに使へば錆てゐる　銀砂子
金槌に父はやつぱり男なり　旭洋
金槌に小使を呼ぶ女學校　同

漁師　清谷旭洋選

父に似ず漁村をぬける都會病　好次
舟つひに歸らず漁村黄昏がれる　銀砂子
雲脚へ漁師は重ふ砂をけり　すみ三
雨の日を網を繕ふ唄が漏れ　粗影

船醉へ船夫は馴れた口を利き　同
徒らに陽はかん〳〵と漁師町　同
（軸）櫓の音に漁師の妻は髪をなで　旭洋

川柳雑誌社　**螢ケ池支部**（大阪）

立春五日初月句會を故室で開く。萬よし、馬行先生に初めての松郎先生がお見えになり會員一同頓に緊張、寒さをも忘れて作句三昧にふけりお話に質問に時間の經つのを忘れた。

「柳」兼題　松郎選

撒水車柳の影をけして行き　壽鷹
柳などあつて交番なまめかし　寂郎
川水が増して柳の葉がつかり　喜留久
どんよりと曇つた日にも柳ゆれ　紫海
柳など植へて引退するもつり　馬行
ぜい竹の先まで垂れる柳の芽　同
老巡査柳に帽子なぶらせる　同
（軸）早退の眼に柳もねてる　松郎

「笑ひ」兼題　馬行選

仲人が來て居て父の笑聲　聖子
眞に受けてゐるへ傍から笑ひ出し　光哉
笑はれて居るへ我が子と云へもはじめ
につこりと笑ふ繼子へもう叱り　呂山
笑はれてゐても平氣で讀んで居る　喜留久
新兵もなれて此頃笑ひ出し　鹿村
何うにでも取れる笑ひのあでやかさ　杏三
笑つてる醫者に患者はトを向き　邦郎
子に笑ひ疲れて炭團取りに行く　松郎
笑はしておいて大きく涕をかみ　同
（軸）樂屋から笑つて出たはよく踊り　馬行

「餘興」席題　萬よし選

此の後で餘興やります東西屋　はじめ
大口を開けて茶女史の獨唱　寂郎
この手品何回も見た餘興なり　壽鷹
餘興になれば子供だけ殘り　るい子
夕べ見た餘興の形で遊ぶ孫　玉政
餘興でよと腹を出し　紫海
餘興まで未だ間があると飲んでゐる　彦春
ちと酔ふておはこの手品やりそこね　喜留久
餘興今油が乘つた總踊り　葭舟
末の娘の踊り餘興にほめられる　一閑
逢曳は餘興の時間待ち兼ねる　杏三
餘興部の見れば附け髭同志なり　馬行
餘興場囃しばかりでまだ開かず　松郎
破門されて以來餘興に傭はれる　同

佳吟

女學生餘興は同じ歌になり　紫海
語ります太夫にくまれてる課長　松郎
席順の不平に餘興かゝはらず　馬行
（軸）策つきて餘興の方で人を寄せ　萬よし

川柳雑誌社東京支部　**ひろし君歡迎小集**東京

二月十一日（東京）仙湖寓にて　千代二報

初對面の安井ひろし兄を建國祭の雪の日に兄の舊知、谷田部、仙湖兄を煩はして東京驛に迎へ、雪ごけの翌日空つ風をよそに仙湖寓にて柳路、仙湖、ひろし兄の舊知馬喰町君と小生の五人が灯ともる頃まで、上方話に興じた。柳路君の「向つて右」の連發にはひろし君も一方ならずめんくらつた。同君は同夜八時四十分の急行で歸阪された。

席題「上京」　互選

なつかしく聞く大阪辯の二年振り　馬喰町
東京驛待ちくたびれた手を握り　仙湖
上京の君をかこんだそばの味　同
復興の東京を見る冀の火　千代二
上京をして新道路のふみ心地　同
震災後始めてですと宿へ言ひ　柳路
上京の生そばへはづす鼻眼鏡　同
上京の袖へサラ〳〵雪が降り　ひろし
淺草のゴタ〳〵したを見て歸り　同

川柳雑誌社　**川柳たかせ會**（島根縣）

高松綠之助報

一月十五日　翠竹選

席題「寒さ」

寒さうに舞妓無言の儘座り　雷相
寒風に食はればならぬ鋤を持ち　輝餘彌
寒い夜のチャリンと鳴つた刄の音　鐵漿
白狀をした交番で寒くなり　互苦路
この寒さ里のことなど案じられ　幸永
寒さにも慣れた工夫の唄ひやう　文明子

席題「二階借」

二階から吹雪の街が見えるだけ　輝餘彌
二階借屋根で秘藏の花が咲き　互苦路
おだやかな二階の客を不審がり　綠之助

枯楓選

二階借便所の遠い愚痴があり　翠竹
二階から吹雪の町が見えるだけ　輝餘彌
病み上り二階の窓で爪を切り　互苦路

川柳雑誌社　**加古川支部句會**（兵庫）

（一月二十三日）加納梅更居にて

（題）寒稽古、赤ん坊、籔入

横綱になる氣やせしも寒稽古　大雲
寒稽古始まる迄は武者ぶるい　洛陽
霜柱ふんで喇叭の寒稽古　梅更
寒稽古昔の父がしのばれる　泰山
寒稽古涙で三味の聲しぼり　鶴蓮坊
はる乳に諦め切れず抱く位牌　一晶
くどの下あわてる膝に赤子泣き　鶴蓮坊
赤ん坊が笑ふたんびに笑わされ　十公
赤ん坊膝から膝へ泣いて行き　梅更
小便の詫を云ひ云ひ兒を貰ひ　鶴蓮坊
赤ん坊母親丈けは知つて居り　梅更
籔入の娘に母は使われる　鶴蓮坊
籔入の丁稚たもとがじやまになり　梅更
年毎の籔入子供殖えるなり　十公
籔入に日の暮れるのが早いこと　鶴蓮坊

川柳雜誌
小松支部
一月十日

芦城川柳社新年句會（石川）

於花月席　本田柳一路報

門　松　谷口水聲選

門松の雪紋服の袖ではれ　柳一路
門松へ仙臺平のすれた音　青歌
門松に顔なでられて醉がさめ　みどり葉
門松の羽子を取つてと初使い　太魚
門松の一軒もない町に住み　茶撫期
（秀）門松の雪をはたいて羽子は外れ　松水
（軸）羽子板の袖に門松引寄せる　水聲

前　途　上野金鐵子選

ドン底の前途希望に輝いて　水聲
瘡切に前途を思ひ計を立て　柳一路
（秀）急がうとすれば前途に動く闇　松水
（軸）黎明に前途の曙光見出しぬ　金鐵子

山色新　野村松水選

色合を氣にして妻へ土産物　柳一路
更新をちかつた晩を飲み歩き　盜鐘
儲かつた事にも凡夫色を變へ　久流美

松　安川久流美選

老松がそびえて寂し空屋敷　松水
老松は此處をあたりを地圖にのり　富久雄
金屏風只一面に老松　水聲
松林だん〳〵波が近くなり　川柳子
枝振りを氣にして松へ隱居立ち　柳一路
鉢の松水きらすなと旅に立ち　松雪堂
（秀）お手植の松は今年も緑榮え　太魚
（軸）松かさがかまどに赤く〳〵もえ　久流美

顔　魚川川柳子選

お寫眞で見たより若いと言ふ世辭　太魚
顔馴染小僧如才のない　お世辭　柳一路
さま〳〵の顔でかるたの夜が更ける　松水
お寫眞ですつかり老けた父を見る　太魚
しみ〳〵と見る母の顔皺があり　盜鐘
顔ぶれにめんじて寄附もことわれず　松雪堂
憎み合ふ顔憎めない土の上　久流美
（秀）牡丹鍋毛鼻の上から化けかゝる　同

川柳
雜誌社

濤聲吟壇會報（豊橋）

一月二十四日　白井梅里報

（課題）借、匙加減、晴れて、外、春の街

近ン坊、夕陽、きう三共選

落ちさうに見える今宵の丸い月　雪村
晴れ渡る朝を草鞋が誘ひかけ　兄位
顔見せの人氣がみちる春の街　枕六
借りて來た傘の標が大き過ぎ　同
匙加減野黨の地盤搖ぎ出し　風樂
外面へ〳〵眼の慣らされる　兄位
涯しなく晴れたる空へ伸び上り　同
生さぬ仲を匙加減する勞れ　同
やつとこさ借金をした丈のこと　枕魚
外の笑ひに別な雰圍氣　兄位
春の街成程なアと立止り　木葉
社會借らねばならぬ物ばかり　兄位
眞つ直ぐに行く嬉しさは春の街　同

川柳雜誌社
姫島支部

姫島支部句報（大阪）

横田眠聲報

題　歌留多

かるた會女中もなかなか貧けて居ず　賀名芽
かるた會襖へさんだあざやかさ　鮎美
かるた會外はどうやら雪となり　眠聲
かるた會一人は窓にみかんむき　冷笑
ものたらぬかるたを取つて早う去に　同

題　初風呂

初風呂に去年のままの頭も居　觀月
初風呂を出れば一番鶏がなき　鮎美
初風呂で金のこす事考へる　同
餅花の下で初風呂帶をとき　眠聲
初風呂へみかんむき〳〵やつて來る　冷笑
初風呂を歸へれば辨當つめてあり　同

題　鏡　餅

鏡餅又も名刺が散つて來る　賀名芽
鏡餅ヒビがはいつて味があり　觀月
鏡餅俺を嘲笑けるやうに見ゐ　冷笑

鏡餅大和魂みせて座し　鮎美
鏡餅串柿一つ二つ減り　同
鏡餅ちと燈が大きすぎ眠聲
鏡餅床は應擧の軸を掛け　同

紀元節社友句會（大阪）

橋本二柳子記

二十二年來といふ珍らしい大雪の紀元節川柳雜誌事務所にて事務所移轉の披露を兼ね社友句會を催しました、降りしきる牡丹雪の中を幾度か轉がつて會場へ掛つけられた社友諸氏と共に午後一時から、雪の生駒連峯を眺めながら句作三昧に耽りました。夕べ内風呂に浸り、次で晩餐にうつり近來にない賑やかな會合でありました。たゞ遺憾であつたは主幹が病臥されてゐたために、出席されなかつたことでした。來會者は素人、松郎、燕柳新水、翠峯、鮎美、萬よし、かほる、助六、春陽

金貨　松郎選

父が遺した金貨一枚　燕柳
二十圓金貨をさげて頭はり　加香
皆集つて金貨を見せて貰ふだけ　助六
キヤラメルを噛んで金貨を裏返し　鮎美
帶〆は金貨で他所の子を育て　かほる
銀行のちらし金貨を桝へもり　新水
親方の金貨をなぶる智慧盛り　萬よし
百人の手には渡らぬ金貨なり　翠峯
裝飾になつて金貨は古びて來　同
賽錢と別に金貨は寄附をする　同
（軸）金貨一枚妾の心さびしうす　松郎

燈臺　互選

干潮に燈臺背伸びした形　助六
燈臺へ學生が訪れる夏休み　鮎美
燈臺を淋しがらせぬ渡り鳥　新水
燈臺も夫婦喧嘩をするさうな　素人
なんぼでも荒れよと燈臺立つてゐる　翠峯
燈臺へ大きな雲が落ちかゝり　同
燈臺へ向いて繪葉書書いてゐる　松郎
燈臺守髭伸びたのを氣に止めず　同

内風呂　互選

火鉢取卷き内風呂の順を待ち　助六
内風呂に妹の乳の張つた事　萬よし
内風呂へ急用は戸をあけかける　二柳子
内風呂を物置にしてやもめ住み　素人
据へ風呂か女房が焚き亭主焚き　同
若い衆來て内風呂はまかせきり　翠峯
内風呂で娘返事に困るなり　同
口笛を吹いて内風呂眼をつむり　新水
内風呂で又始めてる子の喧嘩　同
内風呂へなつかしう入る里歸へり　同
内風呂へ誰がおいたかつげの櫛　燕柳
且さんのあゝ内風呂の熱いこと　同
妾宅の内湯で且那頭打ち　同
内風呂のちべこう雫落ちるなり　鮎美
内風呂で妾の事を考へる　同
内風呂へ妾數島吸うて入り　同
お歸りの遲さも一度暖たゝまり　かほる
内風呂の今日輕石にけつまづき　同
内風呂の母と入れば熱いなり　同
もう糠が無いでと母ば上がつて來　同
内風呂に今日もお歸りあそばさず　松郎
内風呂で息子の心落付かず　同

内風呂の中に出前の聲をきゝ　同
今誰れが來たんやと内風呂の聲　同

川柳雜誌社川柳たかせ句會報（島根）

二月十一日　綠之助報

兼題「煙」　高松綠之助選

煙とも雲ともつかぬ日本晴　幸永
ピストルの煙の後へ忍び寄り　鐵漿
（人）勝算を秘めて煙草の輪をふかし　雷相
（地）煙突に今日の風見て朝詣り　花情
（天）その手紙燒いた煙にむせ返り　笑太郎

席題「刑務所」　互選

刑務所へ今日も一味の者が入り　幸永
身にひけがあつて刑務所こはく見る　雷相
刑務所の當時を思ふ土工部屋　綠之助

席題「古戰場」　互選

古戰場月がかゝつて凄いこと　鐵漿
陰氣雨に哭す古戰場　與一郎
雷柱がぶつきら棒に古戰場　笑太郎
古戰場その眞中へ汽車がつき　雷相
あとかたもなく古戰場耕され　同

席題「孤兒院」　互選

孤兒院へ同情のある年の暮　冬木立
孤兒院へ託し南米行に乘り　幸永
生活苦今日孤兒院をふと思ひ　雷相
孤兒院で誓ひし友が又も死に　綠之助
孤兒院へ父といふのが名乘つて來　同

席題「別れる」　互選

別居してからは姑打ちとけ　綠之助
生き別れ胸の燒き付く思ひ也　幸永
別れた夜寫眞にものを言つてみる　雷相

川柳たまむし吟社 創立句會（大阪）

雨迷報

二月一日料亭平市に於いて發會をした。川柳たまむし吟社の同人は、庭球家としての鳥山隆夫氏を初め我國卓球界の權威である卓球タイムス社同人及雜誌公憤の石井氏に加ふるに川柳雜誌主幹麻生路郎先生の出席もあつて非常に盛會であつた、出席者は宇城、一庭、汀柳、雨迷、治行、和也、芝太郎、潛流、藍雲、遙一の諸子であつた、尙投句せる者に、登山家として、秩父宮殿下の御共を仰せつけられし、朝日新聞社の藤木九三氏、外口、蕉村天一坊、伸夫氏もあつた。

路郎氏選

飲める口打明けてから恐入り　和也
淋しさは酒に魂買ふで生き　治行
二日酔の勤めにすはや停電し　一庭
酒か人か人か酒かの境に入り　芝良久
禁酒してゐながらにゐながらに　雨迷
お氣嫌を取つたつもりの酒なるに　百合女
酒と見て上戸話がよく解り　宇城
酒癖のいゝのが自腹切らせられ　同
校長は意外に飲める人でした　汀柳
酒を呑む手附も女二十六　同

路郎氏選

一杯を命かけでと下戸は云ひ　九三
初戀は命かけても遂げんとし　芝太郎
紹介所安い命が列をなし　宇城
齒醫者また命のちゞむ音をさせ　芝良久
天一坊
同
雨迷
汀柳
同
占ひに短命とあり働けず
せきせいの命は籠の中で絶え
日本へ輕く命を捧げてゐ
宣告をされし命と知らずして
算盤でゆかぬ命を持ちつゞけ
命をば捨てればわけのない話

至誠川柳會（天下茶屋）

一月例會を十九日午後六時から南海至誠團事務所に開く。川柳雜誌社主幹麻生路郎先生を迎へて柳話を聞く（幹事）

月給（兼題）

月給日鳥渡昔の虫を出し　阿形
買物をたのまれて出る月給日　カツキ
無愛想の友もさすがに給料日　黑告子
月給の順でお先とドアを出る　大塚
月給を袋で渡す養子にて　朝陽
月給を使ひ果して違約をし　良雄
月給の多寡を言はぬと言ひ乍ら　靜海
月給の順に凸凹並んだり　吉田
袋ぐち見せてる内は無事なりし　勝太郎
月給はと聞かれ話が行きつまり　イイハラ
やめられぬ月給取をくさしてみ　半田
月給おかみやんはり下手に出　太平
月給に豫算をやらな並べ立て　同
月給日遊廓に來てまた出合ひ　呑風
嫁に來て宅の月給まだ知らず　同
月給は煙草錢さと御曹子　樂居
月給を袋のまゝで拜みたり　同
ステツキを廻して戻る月給日　多聞
月給日下駄は並んで乾いてる　同
月給の憂鬱靴の皺を見る　同

幕（兼題）

元日の風幕へ吹き旗へ吹き　朝陽
間口より幕の廣さに涙ぐみ　靜海
まん幕を脊にして視學咳ばらひ　大平
幕あけて現はれ出たはただの人　吉田
幕一重張つただけにて氣が休み　土井
大名が幕しめてゐる餘興場　鬼三
幕合が待てずコンバクトの忙し　柳骨
生き死にも幕一枚でへだてられ　呑風
お道筋便所に幕が張つてあり　樂居
ラヴシンが明るくなつて物足らず　阿形
説明は字幕と違ふ事を言ひ　同
高津の田中さん木戸まず幕は幕　多聞
模擬店の此の幕丈けの賑やかさ　同

電車（席題）

日曜日ローマンスカーのにくい事　外骨
モガ君へなんと電車のゆれること　あきは
姫人てす席を讓つてくれ顔に　平田
おりまつせ御免やすやと遲いこと　萬屋
風を切る電車の響あれも詩か　末廣
電車では何は何か讀まればすまぬや　土井
ゆく〳〵は車掌になりたい子供なり　鬼三
ごつんと來て美人の膝の柔い事　根井
滿員の頭の上でつれを呼び　太平
電車から見ゐる我家は景になり　多聞
お訣れに電車の笛は本意なう　同
電車道遠くに住むも親の慈悲　呑陽
醉どれの傍があいてる終電車　同

第拾參回鼎座小集（神戸）

三人組報

電話（互選）

借り電話恐れ入りますす事多し　郊村
自惚れへまた呼び出しの電話來る　北柳
電話口重役の出た型になり　同
戀人の電話番號繰つて見る　千鳥
どんな娘か優しい聲の交換手　同

押賣り（互選）

押賣りへ二階の咳が邪魔になり　北柳
押賣りをおし返す程世帶馴れ　郊村
饒舌るだけしやべり押賣り去ん　千鳥
冬の女（互選）
白粉が寒さの顏に乾き切り　千鳥
寒行の女が咽喉を卷いてゐる　北柳
流行妓襟へ冷たい風が入り　郊村
寒むければ寒いで女やかましい　同

月二會忘年句會（尼崎）

十二月十八日　於尼崎松大樓　木三報

席題　世話女房　松　郎　選

世話女房れまきで火消壺へ來る　木三
降り出した雨に氣をもむ世話女房　二竹
子澤山人手を借らず切り廻し　虚白
（人）世話女房下着の合ふた客を　木三
（地）世話女房いま怒つたを忘れ　二水
（天）霜の朝炊事の音につまされる　二竹
（軸）世話女房五圓位はつまんで來　松郎

席題　カナリヤ　互選

カナリヤは師走を知らず鳴いて居る　虚白
カナリヤを紅籠に飼ふよいくらし　同
カナリヤを死なして親父ふさいで居　柳蛙
カナリヤを飼ふて家内がもめて居る　吉朗
カナリヤを買ひに來たのに鳴かぬ　木三
カナリヤを聞いて恩給閑があり　二水
金借りに行けばカナリヤ鳴いて居る　同
カナリヤの聲が響いてお留守なり　同
病む父へ庭のカナリヤ鳴いて居る　二竹
カナリヤの聲にしみ〴〵佛の日　同
カナリヤの聲にふりむく執達吏　松郎
カナリヤを乳母が覗けば影になり　同

兼題　不精者　松　郎　選

不精者物の道理はわきまへて　虚白
まあよいがよいがで暮す不精者　吉朗
不精者ひつそりとした街に住み　虚白
不精者錢湯を出ていゝ氣持ち　白帆
筆不精と書いた手紙の長い事　柳蛙
昔ながらの不精の兄のなつかしく　二水
不精者餘り望みが大き過ぎ　吟女
落ちつきが肝心と云ふ不精者　木三
（人）不精者理屈になれば負けて居ず　二水
（人）不精者明日は返事を出す氣なり　木三
（地）不精者人がさわれば怒るなり　二水
（天）不精者父の前をも憚らず　同
（軸）不精者自分の咳を聞いて居る　松郎
不精者あれで夫人のお氣に入り　同

堀江の夕（大阪）

二月七日　松　郎　報

酔ひごこち藝者の前をそのまゝに　武子
藝者といふものは馬鹿と思ひつゝ　素人
藝者戀を知るや、酒酒酒　刀三
江戸ッ子の藝者淋しい春の雪　ひろし
藝者と思はず旦那逢ふてる　松郎

蒼梧舍偶會（大阪）

二月一日夜　惡源太報

題　はにかみ

無理やりに抱うとすればワット泣き　惡源太
歇留多會下女もはにかみながら出る　耿三
はにかんでやつと出た娘は木綿もの　蒼梧樓
はにかんで居る子へ叔母は年を聞き　武藏坊

題　片意地

凹ませば片一方の意地を張り　耿三
片意地へ仲裁少し腹を立て　武藏坊
かたくなな父へ娘の淋しすぎ　蒼梧樓
グット來て片意地通す氣にもなり　惡源太

灯吟社第一回句會（大阪）

二月五日夜於灯吟社樓上　伊藤愚陀報

兼題　街　萬よし氏　選

停電の街に月が出て居る　耕三郎
寒い街ポリスとポスト立つて居る　素人
停電の街自轉車の灯だけ見ゐ　瓦坊
ラッパ卒街へ這入ると吹きたがり　馬行
スタヂオに一夜涼りの街が出來　游狂
御通過の後とぼしき京の街　武子
新市街見てくれのよい家が出來　呑想
街の灯に魂までも踊らされ　愚陀
街へ出たついで貯金をして歸り　松郎
街から街へ失業何のあてもなく　素人

二人共淋しい街で戀に生き　琴人
洋風は街路に向いた所だけ　悠生
(佳)街の灯を郊外電車運んで出　同
(佳)ぬかるみを街巾せまう四季袋　松郎
(軸)カフエーのこの街だけでもう九軒　萬よし

席題　田舎　松郎　氏選

失意々々歸馬車に搖られ乍ら　亂耿
乘合が憂らせて行く田舎道　北海道
大阪は恐いところと桑を植ゑ　萬よし
少し儲けて田舎から母を呼び　琴人
田舎道不意にさのさの三味が鳴り　かほる
田舎から只平凡な手紙なり　愚陀
牛の啼く聲から醒める嫁の里　馬行
重役がこんな田舎に住んでゐる　同
(軸)親且那田舎者をば輕んぜず　松郎

席題　友　馬行　氏選

かきもちへ友の大きな手が伸びる　亂耿
友達が乘換券をくれるなり　かほる
面倒な惚れやうをする友と呑み　三笑
ひとり身の友が露骨な酒落を云ひ　同
灯がついてから友達のなつかしさ　松郎
友達の變つた趣味を聞される　愚陀
悪友と清く別れてものたらず　同
煙草屋で聞いたと表から怒鳴り　萬よし
(軸)小切手を見せる友達行くと云ふ　馬行

席題　盗み酒　三笑　氏選

盗み酒　常は働らく男なり　松郎
盗み酒どこで暮すも二人なり　武子
盗み酒冷めたい寢間へはいるなり　かほる
小便が馬鹿に近いと盗み酒　萬よし
顔に出ぬつもりで飲んだ盗み酒　琴人
盗み酒　急に鼠が走り出し　愚陀
盗み酒わて知りまへんだけで濟み　亂耿
盗み酒ざらつく物に唾をはき　馬行
(佳)盗み酒してお家はんに管巻き　素人
(佳)盗み酒顎から臍へ流れて來　馬行
(佳)盗み酒やさしい聲で猫を追ひ　かほる

席題　ダンス　互選

春や春　踊れや踊れ君と僕　遊狂
さや豆を口にダンスの順を待ち　かほる
ダンシング四本の足のもつれ樣　呑想
ダンス今終りを告げて靜かなり　武子
ばつたりと倒れてダンス終ひたり　愚陀
ダンスから歸るとバンドゆるんでる　三笑
踊つて來て尻ふりダンス得意なり　琴人
靴れさうに靴ばつかり光つて居　同
一人つゞダンス舞臺を消えて行き　馬行
トーダンス足が疲れた頃に幕　同
ダンサーと序の樣に戀をする　亂耿
ヴイクターのタンゴ爪先浮れ出し　同
保安課の人と知らずに踊つて居　松郎
ダンスホール二三人來て風が入り　同
日南ならねらいほこりのダンスにて　同

月二會例會（尼崎）

一月七日　水三報

席題　雪　互選

した事のないのがスキーよく話し　木三
初雪に子供を起す親心　柳蛙
皆肩をいからして來る雪の道　二水
雪國へあこがれもちし事もあり　吟女
雪だるま片目が溶けて畫になり　同
雪の夜を薄情者と律義者　松郎
雪の夜をしみ〳〵實の姉であれ　同

席題　寒がり　互選

寒がりへもうそんな年なのか　吟女
寒がりの父の眞似する股火鉢　柳蛙
寒がりのだん〳〵火鉢の蓋になり　二水
風の音聞いて寒がり丸ふ居る　吉期
風呂入りに寒がり急に脱げもせず　同
寒がりの母を思ふて年は明け　二竹
寒がつてばかり居ないで動きなさい　同
寒がりは登山で死んだ例を引き　木三
寒がりは目ばかり出してゝた寒し　同
誰か起つだろと寒がり思つて居　松郎
寒がりへ今朝の時計は進んでず　同
寒がりが一人默殺されて居る　同

兼題　相性　松郎選

相性へ今更女愚痴を云ひ　白帆
相性が悪いと云へぬ許婚　吉期
相性もあつたものかい出來てゐる　龍三
迷信に惜しい二人を犧牲にし　虚白
相性へ伯母も昔の例をひき　吟女
相性のつひでに怖ひあたる事　同
相性でもらつた妻の氣が強く　木三
黒襟の娘相性ばかり云ひ　同
相性を見てやるなどゝ年を聞き　二水
喧嘩してから相性をくつて見る　同
夫婦かと云はれる程に性が合ひ　よし源
相性がよすぎ喧嘩がして見たく　同

相性に昨日も今日も變りなし　二竹
糸を繰り乍ら相性ほゝ笑まれ　同
相性が何んぢやと男強いなり　同

瞰下堂句會（大阪）

壹月卅一日　陶山秀甫報

自轉車また叱られる交叉點　鶴峯
自轉車すぐ濟む用事らしく云へ　同
幾外を積んだ自轉車速いこと　同
石一つ自轉車をうねらしてゐ　二柳子
自轉車で呼びとめてる急な用　同
手放しの自轉車乘あぶなかり　秀甫
追越した自轉車乘戻つて來　同

萬よし偶會（大阪）

二月十四日　庄萬よし報

腰かけへ少しはよい雨模樣　赤澤
腰かけてよいと二次會三次會　同
腰がけへまあ〳〵〳〵と幹事振り　高
コツプ一ツ割られて極度有がたう　同
大コツプ四五杯列べ國訛り　屈
一と口にコツプあふつて且那はん　萬よし
腰かけで車夫は選擧に無中なり　同

蒼梧舍二月例會（大阪）

二月十日於村野蒼梧庵　石川双葉子報

句評會兼題　眼鏡　互選

眼鏡をば初めから母不賛成　晩香
眼鏡を取れば平凡な顏　耿三
近頃は眼鏡もかける未亡人　源吾
何度だと聞かれて困る伊達眼鏡　狸仙
新聞へ易者の樣な虫眼鏡　双葉子
眼鏡ふいたりかけたり本にあき　蒼梧樓
近視眼嘗めてる樣に本が讀み　惡源太

二　階　互選

二階から用の無いのが首を出し　耿三
女客來てから二階落ちつかず　双葉子
二階では近所の秘密掘つてゐ　源吾
掃除するだけに二階の窓が開き　蒼梧樓

黄　昏　互選

たそがれが貧民街に寄せて來る　源吾
星一つ薄墨色の山の上　惡源太
黄昏に妻のすがたとすれ違ひ　双葉子
ひと掘り餌をやつてから鷄屋をゝ　柳川樓
ポンヤリと夕陽の落ちあとに立ち　蒼梧樓
畫家ならばなどと夕燒眺めてる　耿三

寄　附　互選

寄附金で成金振りを先づ知らせ　平八
出せと云ふ寄附には出せぬ男なり　源吾
當然のように氏神寄附をさせ　耿三
寄附帖へとにかくと云ふ筆をもち　蒼梧樓

債　券　互選

債券を當てた小僧がれたまれる　柳川樓
女もう債券あたる事に決め　惡源太
樂しみに後家債券を買ふて見る　蒼梧樓
五千圓あたつた夢のあとを追ひ　双葉子

手　紙　互選

流連けの床で手紙を書かされる　柳川樓
母からの意見六錢貼つてくる　耿三
ひつたくる角封筒の女文字　蒼梧樓
母からの手紙ひらけば嫁の事　惡源太

偽　物　互選

偽物だのに堂々と髭があり　狸仙
偽物と知れて巡査の青くなり　平八
偽物へズボンかさして輪を吹かし　蒼梧樓
偽物の軸を社長はほめておき　惡源太

出勤簿　互選

出勤簿順に給仕は敬つて　耿三
出勤簿頼むと自働電話から　平八
もうすでに課長の前に出勤簿　狸仙
皆勤が今日一日の出勤簿　双葉子
新しい出勤簿の順を見る　蒼梧樓

席題　河豚　互選

死なば死れと河豚で飲んでゐる　武藏坊
少しづゝ澤山食べる河豚の鍋　耿三
河豚料理マサカ〳〵を頼みにし　蒼梧樓
食つてから河豚と云はれて青くなる　惡源太

第二十九回萬よし川柳

木　版　本田溪花坊選

社務所から出ると木版いたゞかれ　源坊
先祖にも木版の趣味あつた藏　黄一
現代に木版といふもので刷り　亂耽
木版にされて九代目長い顏　燕柳
木版と思へぬ程に込み入つて　仙坊
木版のよくもこんなに出事る事　同
拜觀に木版へ立つ別な趣味　翠峰
いつ出來たのか木版のよごれやう　露斗
木版へ職工の眼の動くこと　幸泉
衝立てに木版の四季揃ふてる　淨閑

木版も彫る器用さで詩人なり　琴人
(人)木版に少し崩れた字も寫り　幸泉
(地)木版へ窓からにぶい陽が流れ　翠峰
(天)木版の未だ書き足らぬやうな線　其象
(軸)刷もの手のかたうごく寫樂の手　溪花坊

川柳雜誌社 **糸屋町句會**

二月十五日夜於茶樂館　川合舟々報

兼題　糸卷　松郎氏選

母の手に糸卷輕ふ動くなり　正博
糸卷が落ちるとこまで搔き出され　双葉子
女の子クレヨン程に糸をもち　蒼梧樓
糸卷を持つて子供の使ひなり　武藏坊
かひたるい手に糸卷がふくれて來　孤舟
やう〳〵に糸卷取れば雲つて來　翠峰
どうせ立たんな事に糸卷不精する　舟々
糸卷の遂に亭主の手に渡り　同
無茶苦茶にした糸卷を持つて來る　同
(佳)泣いて來た子に糸卷の手が止り　孤舟
糸卷の前に隣りの子が座り　陽喜亭
糸卷を見てもきちんとした心　翠川
糸卷を二度目の家でなくしたり　赤城
糸卷を貸すにも嫁の好き嫌ひ　毒仙
糸卷へそんな心の許嫁　翠峰
糸卷の糸の紅さも十八九　同
(人)糸卷の手をばいみじきものに見る　義情
(地)柄褒めて扱て糸卷に色がなし　新水
(天)糸卷の行衛に子供うたぐられ　蒼梧樓

兼題　黑板　かほる氏選

黑板へ先生はもう向く時分　松郎
黑板へ書ふとすればフト忘れ　正博
遠足の地圖へ黑板小さすぎ　義情
黑板へ放課の後の陽が當り　耿三
黑板へいつぱい書くと鐘がなり　陽喜亭
黑板へ字をあてごうて先生留守　孤舟
黑板の裏を覗けば上草履　翠川
黑板へ先生のせき突き當り　蒼梧樓
黑板塗り替へる日の郡視學　翠峰
黑板に曰く三厘がたさがり　舟々
(軸)ひらかなを書くと黑板ひつぱり　同

席題　垢　互選

晝風呂でほつきり腕の垢を見る　かほる
その垢を氣にする程によく治り　双葉子
流してる方があきれる程の垢　柳河樓
どこに垢あるのか妾流させる　陽喜亭
貧乏はしてるが垢はつけさせず　翠川
垢すりを持たされて出る無精者　惡源太
垢も垢半月振りの風呂に入る　耿三
病上り垢が氣になるうらゝかさ　新水
子を五人育てゝる垢こすり　蒼梧樓
伴天の垢で姉御の格を下げ　赤城
ひきてから襖へ垢がついて來る　毒仙
寶物へ何人目かの垢をつけ　孤舟
襟垢を氣にする妻のやせてゐる　同
一人者枕の垢が冷めたくて　翠峰
何をしても器用な質で襟の垢　舟々
襟垢か拭いてるとこへおこしらへ　同
垢染みてゐる首卷に生を知り　かほる
手垢指垢感謝にみちて居たりけり　松郎

席題　女店員　互選

女店員ぞろぱん持つての忙しさ　同
今日も來ぬ女店員に立つ噂　義情
女店員柄のいゝのは隱しさき　耿三
ウエターの友達もある女店員　陽喜亭
女店員自分も一つ買ふておき　孤舟
いやらしい人もあるのよ女店員　柳河樓
女店員課長室からすれて出る　翠川
女店員自分の肩へかけて見せ　惡源太
女店員店員章をおぼへられ　毒仙
女店員調和と云ふを知つて來る　かほる
女店員父の怒りはまぬがれず　蒼梧樓
女店員ある日妾を考へる　赤城
女店員行くも歸へるも主婦の友　新水
公設へ廻つてかへゝ女店員　双葉子
女店員老けてゐるのが手に負へず　同
どつちみち嫁かねばならぬ女店員　翠峰
女店員愛想笑ひをしたばかり　同
女店員うつかり欠伸出るところ　舟々
女店員はつきり返事してのける　松郎
その上の事は知らない女店員　同

川柳雜誌社 **京都支部偶會**

二月十八月夜　桑原京郎報

題　買喰ひ　互選

買喰ひの錢は兵子帶からもでる　京郎
買喰ひの夜鳴き呼び込む程に馴れ　同
買喰ひの費ひ果して灯を見つめ　同
買喰ひなどはせぬ立志傳　同
買喰ひの守子は走り元で食ひ　赤城
ほゝ張つたまゝ買喰ひは返事する　同

買喰ひをしてると主人歸つて來　同
買喰ひの皆んな同んじものを喰ひ　舟々
叱られた位買喰ひ泣くものか　同
買喰ひの頃の日覆も懐しく　同
買喰ひについて鞄を持たされる　同
買喰ひの足が並んだ午後三時　同

燕柳居偶會（大阪）

二月十六日夜　猪野燕柳報

上げ鬚の鼻から下を塗つて來る　三笑
應接室招じて置いてコンパクト　加香
才造は出るなり顔の喧嘩なり　燕柳

幸深川柳句會　第四回（愛知縣）

二月一日夕開卷通句　大竹美香報

餅

尻餅をついて巾飛笑わせる　二蝶
餅腹の後へコーヒー色氣なし　昇龍
餅を搗く側で子供が氣合ひ掛け　浩精
元日の雜煮無理でも子に食はせ　滝爽
餅好きも三度々々は飽いちまい　美香
お得意の手加減でつく貫餅屋　三好

マント

新調のマントの買値聞いて見る　進爽
田舍者マント着馴れぬふうが見に　才華
滿員の電車マントが邪魔になり　昇龍
マント着りや妻は出先をすぐ尋れ　松芳

親　切

親切は誰も彼にも差別せず　昇龍
親切な友の意見をうるさがり　二蝶
親切な手紙を讀んで母は泣き　芳流
親切な言葉の中に現われる篤美
親切な人が歸れば暗いこと　四位地

川柳たかせ會一週年紀念句

（島根縣）　森田笑太郎報

風　　青砥不二綱氏選

（人）電線に風は懸つた儘　揚り花情
（地）竹竿へ少うし風を孕む　風淳治
（天）電線にキリ〳〵廻り風は亜れ　絲之助

進む　　尾山夜半杖氏選

進級も間近愛兒の輕く　痞せ雷相
喜びの日は刻々と近くなり　喋朗
文化村氣の進まない母がゐる　互苦路
（人）サイレンへ進む時計の癖を見々　翠竹
（地）榮進に妻のないのを淋しがり　雷相
（天）孤兒院の映畫默つたまゝ進み　淳治

笑話三捻　池邊生

大阪朝日新聞の川向ひに「川柳」と云ふ料理屋があり、若い記者連中が一時盛んに通つたものである。或る時某氏ストーヴに尻をあぶりながら「君川柳が此頃非常によく流行るやうになつたね」と云へば「嘘言ひ給へ僕は昨夜行つたところ、仲居が此頃は選擧でとんとお客さんがありませんと言つてゐたよ」に某氏ヒカーン。

◇

北濱の老人連　此頃若い者がよくパリジヤン、パリジヤンとか云ふがどんなところかと呑みに行く、大阪梅田の太平ビルの地下室、紫煙濛々たる中に納まつて、美人のお酌で陶然となつたはよいが勘定となつて見ると、高いの何のつて目が飛び出るほど取られ「此頃の若いもんはあんな高い酒呑んでよう金が續くことや」その話を聞いた若い者「藝妓買ひなするより安ふつきまつせ」

◇

某代議士候補者、靴を脱いで頭を土に摺りつけて約十五分涙を流し投票依頼をした。之を見た有權者「乞食になる方が適任だなア」又「あの調子で物を頼んで貰へばこちらが運動してゐるあの事も通るちやらう」又「否や當選したら逆に威張り散らすだらうよ、さうでもしなけりや埋合せがつかんよ」

◇

革鄙酒に醉つ張らつて家へ歸る「おい早く起きんか」ドン〳〵戸を破れるやうに叩く、隣りから「何をしてらつしやるんですか早くお這入んなさい」「いや奥樣どうも恐縮、うちの女房は蹇ぼすけで困りますよ」「何を言つてらつしやるんです妾ちやありませんか」

轉居御通知

橋本二柳子

二月四日左記へ移轉しました。此の廣告を以て御通知に代へます。

大阪市住吉區杭全町六〇三番地
（大阪市營乘合自働車市電阿部野橋より平野行に乘車、今川町停留場下車東半丁）

編輯後記

▼二月號の「月評」が非常な好評を博した、豫期してゐたことではあるが、餘り評判がよいのでこんなことならもつと早く始めればよかつたと皆な言つてゐる

▼本號は原稿が山積し、到底掲載しきれないので、遂に止むを得ず川柳漫畫「人の一生」「廿四篇まで」「雜文欄」「古句質疑」などを休載せなければならなくなりました、筆者及び讀者の御寛恕を願ひます

▼不朽洞から主幹路邨先生編著の川柳漫畫「累卵の遊び」を刊行することになりました。本誌と殆んど前後して出版される筈です、至急御申込を願ひます定價壹圓（大阪市西成區千本通五丁目七番地不朽洞發行）振替口座大阪五二五八五番

▼山口縣都濃郡富岡村に富岡支部を新設しました。兼重白鷗氏幹事として御活動下さることになりました、今後の健全なる發展を祈ります

▼籔川支部の幹事尾添雷相氏が今回幹事を退かれ森田笑太郎氏を後任に推薦されましたので森田氏が今後幹事として御活動下さる事になりました、尾添氏が今日まで本社の爲めに支部幹事として御活動下さつた御熱心と誠意に對し深く感謝します。尚ほ雷相氏は今後も同支部の爲めに從來同樣御助力下さることになつてゐます

▼金澤支部の宮本銀砂子氏より毎月第一木曜日に「作句研究會」を開催されるとの通知がありました、此種の催しは他の支部に於ても毎月日を定めて催されることを希望します

▼青森支部の喜田飯山氏から雪で眼を惡くして灰色の眼鏡をかけて目藥の御厄介になつてゐる青森市立圖書館は大阪の古本屋公立社の三分の一も本がない大阪に比べると萬事こんな調子最も自慢になるのは雪の多いことだけ、これは大阪が逆さになつても青森には追つくまいとの通信がありました。

▼平塚支部の酒井駒人氏から八月頃にお父さんになるとの通知がありました、男の子であることを祈ります

▼本社客員紫谷紫舟氏は一月下旬男子を儲けられました一郎と命名毎晩寢入つてゐる子供死んでゐはしないかとつゝいて見られるさうです嘗家らしいところが面白いと同人間の評判々々

▼兵庫縣第二區から普選第一回の總選擧に出馬された三輪强氏（破顏枝）は武運拙なく落選されました、遺憾此上もありません

▼安川久流美氏は二月中旬に男子を儲けられ「茂道」と命名されました

▼川柳研究家としての巨星今井卯木先生が二月二日午後四時に逝去されました、柳界の人なる損失であるのは勿論、本誌にとつても有力なる客員を失つたことは、遺憾此上もないことであります謹しんで哀悼の意を表します。

▼安井ひろし氏は二月十一日上京東京支部の人々に會合され久々振りでゴシップ帳に花を咲かせたさうです。

▼加古川支部の加納梅更氏は二月上旬女兒を儲けられました

▼東京石川流泉氏の尊父が二月十日に死去されましたので謹んで哀悼の意を表します（革邨記）

轉居と改號

▼橋本二柳子氏は大阪市住吉區杭全町六〇二番地に轉居

▼酒井枝郎氏は大阪市天王寺區生玉町四七番地へ移轉

▼水田喜瑞坊氏は十公と加納嶽堂氏は梅更と改號

正誤

二月號　七頁　紫を乘るは柴舟かの誤り四四頁中段皆名手にては皆名所にての誤同頁下段劇拜堤は並堤の誤▼一頁「小遣ひ貰ふと丁稚そこに居ず」素人とあるは多喜女の句の誤り

投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の郵紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第五卷第五號課題

三月五日締切

（各題十句以內）

▼蠟　村田周魚選

▼藏　喜田飯山選

▼鈎鐘　橋本二柳子　安井ひろし　共選

第五卷第六號課題

四月五日締切

（各題十句以內）

▼馬　森東魚選

▼貫ひ子　佐々木三福選

▼手擢　福田山雨樓　松丘町二　共選

毎號募集

▼近作柳樽（廿句迄）麻生路郎選

▼古句質疑（三句迄）蛭子省二擔當

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

普通號　一部　金參拾錢
新春特輯號　一部　金五拾錢
八月特輯號　一部　金四拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封緘に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和三年二月廿五日印刷　第五卷第三號
昭和三年三月一日發行　（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸一郎

發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社　振替大阪三一五一四番

大阪市住吉區杭全町六〇三番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　サクラヤ書房　其他市內各書店
（東京仲見世）玉森堂　（神戸）米田、後藤　（函館）石塚
（石川縣小松）マコト屋（京都）三宅

川柳雜誌社關係の人々

（いろは順）

賛助員

池澤樂居　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　嘉納純　田中辰二　田中香涯　長崎柳秀　野草省三　國枝史郎　藤村作　藤本卯之助　小酒井不木

赤井清司　末弘嚴太郎　前田雀郎　小出楢重　河南攸馬　木村半文錢　龜井花童子　柴谷柴舟　篠原春雨　高橋かほる　堀内靜雲　本田柳一路　檜山千代二　嶋田翠峯　宮本銀砂子　水谷鮎美　水田黃彩　朝田新水　猪野燕柳　石川双葉子　長谷川一徹　畑田炭車　横田眠聲　西原柳雨　高見柳骨　兼重白鷗　高橋左馬　中澤濁水　中見光路　辻京郎　桑原文緑　桑島桑郎　柳川洲馬　安西杏三

客員

伊藤彦造　岡田三面子　川村花菱　川上三太郎　吉田清　吉岡鳥平　西本三笑　酒井駒人　藤里藤園　松盛琴人　松本助六　矢田右大臣　高橋緑郎　三好革郎　安井ひろし　麻生路郎

特別社友

岩崎柳路　岩本素人　原史風　徳田双柳　喜田飯山　北山悟郎　太田朝陽

維持社友

庄萬よし　松丘町二　越村加香　麻生路郎

編輯局（特別社友）

主幹　橋本二柳子　麻生葭乃　森田笑太郎

大阪市南區新戎橋南詰　道頓堀支部　幹事　庄萬よし

大阪市北區北森町三十二　天滿支部　幹事　北山悟郎

大阪府泉北郡濱寺町一〇〇七　濱寺支部　幹事　太田朝陽

神戸湊町一丁目電氣局西　神戸支部　幹事　庄萬よし

山口縣山口町石原小路　山口支部　幹事　柳川洲馬

東京市芝愛宕町一ノ六大成社內　東京支部　幹事　岩崎柳路

函館市靑柳町五〇　函館支部　幹事　龜井花童子

大阪市住吉區安立町五丁目　住吉支部　幹事　德田双柳

朝鮮仁川仲町一丁目八　仁川支部　幹事　矢田右大臣

松江市雜賀町　松江支部　幹事　奈良井仙坊

石川縣輪島町鳳至上町　輪島支部　幹事　桑島文絲

石川縣小松町猫橋詰　小松支部　幹事　本田柳一路

高知市本與力町　高知支部　幹事　中澤濁水

大阪市西淀川區姫島町五二一　姫島支部　幹事　横田眠聲

大阪市外阪急沿線刀根山療養所內　螢ヶ池支部　幹事　安西杏三

金澤市榮町　金澤支部　幹事　宮本銀砂子

大阪市東區糸屋町二丁目七　糸屋町支部　幹事　川合舟々

和歌山縣田邊町幽靈松下　田邊支部　幹事　左馬

島根縣簸川郡今市町　簸川支部　幹事　森田笑太郎

豐橋市旭町　豐橋支部　幹事　高橋緑郎

神奈川縣平塚町旭座前　平塚支部　幹事　酒井駒人

兵庫縣加古川町大川町　加古川支部　幹事　水田黃彩

靑森市古川町美法二七　靑森支部　幹事　喜田飯山

京都市七條大宮東入　京都支部　幹事　桑原京郎

山口縣都濃郡富岡村上野　富岡支部　幹事　兼重白鷗

萬よし懸賞川柳「白鶴」選句發表

川柳雜誌一月號發表の萬よし川柳「白鶴」は、多大の歡迎により應募者二百二十六名、集句六百二十句、清記の上各選者の高選を煩はじました。その結果、五點句二句ありて最高點句を得ることが出來なかつたので合議の上第一席を缺位とし、第二席二句、第三席三句、佳作甲七句佳作乙二十四句として賞金を增加いたしました。この擧を旺んにして下さつた投句家各位へ深甚なる謝意を表します。（採點三才三點、五（十）客二點平拔一點）

大阪道頓堀新戎橋　庄萬よし
大阪横堀壹丁目　嘉納合名會社

椙元紋太先生選　三才、五客、平拔十六句
塚崎松郎先生選　三才、十客、平拔二十句
石賀馬行先生選　三才、十客、平拔三十七句

第二席　五點句、賞金五圓（二名）

白鶴の機嫌を押す子曳き出す子（松天、紋五）
東京市駒込吉祥寺三一　鈴木豆

腰掛へ白鶴狹ふ飲むうまさ（紋地、馬十）
大阪市南區鰻谷西之町九　井村迷佛

第三席　四點句、賞金三圓（三名）

來意も聞かず白鶴の猪口を强ひ（紋五、松十）
府下豐能郡池田町二八一七　山川白蝶

白鶴が緣ごはなりぬ君と僕（紋天、松平）
御影町平野字城の前　仙勝三

白鶴に素直な父となつて寢る（松十、馬十）
北區旅籠町三二一、藤綱方　東谷聞治

佳作　甲）三點句、賞金壹圓（七名）

白鶴に豈將相を論ぜんや（馬天）
仁川、宮町　新米生

閉て切つて留守白鶴のあるを知り（松地）
大阪本庄　一枝生

白鶴を中に夫婦の五十年（馬地）
和歌山縣妙寺町　櫻井無心

白鶴の二合瓶から旅で醉ひ（紋人）
大阪南錦屋町　北野春江

白鶴を注がせ羞しがらせてる（松人）
島根縣高松村　尾添雷相

白鶴がすゝめ上手にしてしまい（馬人）
府下螢ヶ池　鹽田大棗子

白鶴のみな身についたやうに醉ひ（松十、紋平）
大阪姫島町　横田眠聲

佳作（乙）二點句　賞金五十錢（二十四名）

白鶴は内氣な父を慰める（馬紋）
大阪桃谷町　子太郎

白鶴の瓶たまることたまること（馬十）
大阪天滿橋筋　井上凡平

午後六時白鶴が待ち妻が待ち（松馬）
大阪西圓手町　和田源坊

白鶴を酒屋も内で呑んでる（馬十）
大阪島町　森田秀一

白鶴へみんな揃ふたいゝ話（馬松）
白鶴に親しみ親父折れて來る（松十）

白鶴をチントンシャンと提げて來る（松十）

大阪横堀七　伊藤三五樓

注文の酒へ白鶴言ひ添へる(馬十)
大阪中津町　松岡幸泉

白鶴の氣焔課長に負けて居ず(馬十)
大阪川崎町　今村吉郎

手さぐりへ白鶴の瓶しかと知れ(馬十)
大阪天王寺町　村野蒼梧樓

雜音の中に白鶴だけの味(馬十)
東京四ツ谷　石井盜泉

いゝ酒と言へば白鶴持つて來る(紋五)
別府　凡一

白鶴を片手に筆の走り過ぎ(馬松)
大阪九條通　高取

吉日を待つ白鶴の輪が青い(松十)
大阪糸屋町　川合舟々

白鶴を一本つけてからの事(松馬)
大阪谷町　上田新一郎

百事意の如く白鶴呑んでゐる(紋五)
備後　横山東城子

白鶴に此の世を強ふ生きて呑み(松十)
備後　西本光登

荷揚げ場の白鶴倉へつゞいてる(馬十)
大阪上汐町　增位汀柳

白鶴に醉ふた自分を壁に見る(松十)
大阪逢阪町　東松山子

つけが來た白鶴の瓶どうに空(馬十)
大阪吉野町　藤田豚二郎

白鶴で醉ふてゐるのへ呼びに來る(松十)
大阪田島町　光柳

白鶴が遂に出させるかくし藝(紋九)
山口縣宮市　池田可宵

白鶴と夫婦で決める火事見舞(馬松)
大阪田島町　高田九柳

白鶴で天下の事が決められる(松十)
大阪北濱　三好革郎

選外佳句(一點句)

白鶴を呑む口元も父に似て　玉仙
妙寺町

良い知慧も出す白を呑み過し　柳山
同

白鶴を呑ます宿屋で宵寢なり　松舟
池田

白鶴の熱燗今日も恙なく　眠聲
姫島

白鶴の機嫌で茶屋の段梯子　白水
我黨の天下白鶴からうたい　源坊
圓手町

白鶴を自慢にウエーターついで行き　失名

白鶴だなへニツコリと上かんや　嶺月
神戸

白鶴へ上戸は春の心持ち　青洞
淡路町

舊帥曰くさあ白鶴だ呑みたまへ　蒼生坊
田邊

當選に白鶴樽のまゝで來る　春陽
播磨

二代目もやはり白鶴呑んでゐる　雅彦
疊屋町

白鶴にしてからすんと客がふへ　光雄
糸屋町

千鳥足まだ白鳥をしかと持ち　齋藤
栃木縣

團隊に今朝白鶴を賞められる　緑之助
島根縣

白鶴の曖簾ばかりを選つて呑み　たけじろ
北河内

臺所に白鶴だけが光つてゐ　人
上福島

白鶴が好きと心得てる酒屋　同人
同

すきやんと白鶴呑んであきばん日　公
大阪

白鶴が足らず白鶴買ひに行き　一秀
島町

白鶴のある酒屋まで買ひに行き　赤城
糸屋町

貧乏の中に白鶴だけの味　菊太郎
曾根崎

妾宅の方は白鶴樽で据へ　柳秀
御影

白鶴の鏡へ鉋屑が散り　大夢子
大阪

白鶴の名に春らしい醉心地　蒼梧樓
住吉區

味ふて白鶴を呑む顏を寄せ　盜泉
東京

白鶴と言ひ當てた友好きらしい　愚源太
天王寺

白鶴で醉ふて素直に戻つて來　久次
金澤

附記 選外佳作二十八句は來月號の本誌「白鶴」廣告欄で發表します

清酒白鶴釀造元 **嘉納合名會社**

讀書子に告ぐ

今のやうにあとから〳〵新刊が出ると新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよ〳〵讀むころになれば、もう古本で至極新らしい本が出てゐる。こうなればわざ〳〵新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新らしい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新らしい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことがわかるう。

（路郎生）

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

金田晴正著

桃太郎の研究

洋裝美本　全一冊

定價　五十錢　郵稅　二錢

日本一の昔話桃太郎に關した著者多年の研究を發表されたものです、如何に我國民性にピッタリと合つて居るかは斯書を見れば直ちに判明します

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話　南五六二番

貝印レコード

三月新譜

映畫創改題「轉落」**再生**（全二枚）（美麗サック入）

月形龍之介 外一座 解說 笹木溪雪

涙花節　太夫の最後（二枚續）　吉田一若
同　田宮坊太郎（二枚續）　壽々木米若
同　小松山の月影　藤沼圖太郎（二枚續）　末廣亭小辰丸
映畫涙花節　祐天吉松（二枚續）　上田五萬樂　內外管絃樂團
義太夫　千本櫻「仇な枕より」「父も聞こゐずより」　豐竹團司　糸豐澤小住
喜歌劇　歡樂の鬼　寺井金春　大宮雀城　常盤靜子
萬歳　串本節、小原節　櫻山源丸　櫻山小夜子　三味線　櫻山梅夫
滑稽　三寶荒神　內外演藝團
謳刺　憶戰艦歌、十字街　鈴木白洋
書生節　川中島（二枚續）　薫水雨宮錦峰
錦心流琵琶　流行唄　都々逸くすし　さいこどんく　シロホン入　山村豊子
端唄　重ね扇、二上りくすし　「チューブベル入」

ハモニカ（シロホン）（ベル伴奏）　夢の國、道化役者　南方康三
管絃樂　映畫樂（格闘の卷）　內外管絃樂團
ブラスバンド　安來節、磯節　神戸宮崎音樂院
キシロホン　鎧三重、新狸　荒川倉藏
客引唄、竹雀　コルネット　阿部芳越
ピアノ　成田七五三夫
三味線　立花家梅之助
チューブベル（ヴァイオリン）（三味線伴奏）　一夜明くれば　荒川倉藏
七福　指揮　阿部芳越
サキソホン　長松の緣　杉田良三
シロホン　荒川倉藏
ベル　竹屋佐喜二
三味線　杵屋佐喜加壽
同

合資會社　內外蓄音器商會
阪神沿線今津町

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和三年二月二十五日印刷納本
（毎月一回一日發行）
昭和三年三月一日發行

川柳雜誌　（第五十號）　定價參拾錢

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

川柳漫畫
累卵の遊び

川柳とは何ぞや――の數萬言を聽くよりも本書を繙け！　實に愉快に、而も不知不識の間に、川柳の妙諦を知悉せん。

內容概目

川柳漫畫　累卵の遊び

日月は輝く

大衆と共に

麻生路郎氏が「川柳雜誌」に連載して非常なる好評を博したる川柳漫畫漫文集に、更に川柳家諸氏の力作になる佳句名吟を類題により收錄したるもの――。

「週刊朝日」特別號に掲載されたる川柳佳吟に選者麻生路郎氏が短評を加へて初心者の參考に資したるもの。

「諧談倶樂部」柳壇の佳什に、その選者麻生路郎氏が短評を附加して一般讀者の興趣を湧かしめたるもの――。

（昭和三年三月上旬發行）

定價壹圓
送料拾錢

發行所
大阪市西成區千本通五の七
不朽洞
麻生ヨシノ
振替口座大阪五二五八五番